
のっぴきならない事情によりて

temso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のつぴきならない事情によりて

【Nコード】

N2213A

【作者名】

temso

【あらすじ】

剣と魔法のファンタジー世界で、ごくごくふつゝに暮らす少女とちびっこ少年の冒険が、ばちばち始まる！

プロローグ

「村長？」

明朗でかわいらしい声が上がった。

声の主は年のころ十七、八くらいの娘だ。いかにもなコケティッシュフェイスだった。

「お呼びですか？っていうか、寒いから早く開ける」

見かけとは裏腹に、口はかなり悪い。

「おお、よく来たな」

ぎい、と音がして、木造の安っぽいお宅のドアが開いた。そこに立っていたのはよぼよぼのおじいちゃんだった。

「なんですか。こんな時間に呼び出して」

少女はおかんむりのご様子だ。

でも、それも無理のないことだったりする。

だって、まだ日も昇っていないような早朝なのだから。

じじいはミーナを中に招き入れるや否や、すぐに切り出した。

「うむ。よく聞け、ミーナよ」

老人はこれっぽちも悪びれていなかった。

ちなみに彼がミーナをこんな早くに呼び出した理由は簡単である。じじいだから起きるのが早いのだ。

「なんだよ」

ミーナは実に不機嫌そうな声で言った。というか、実際不機嫌だ。

「うむ。お主は、昔からこの村に伝わる伝説を知っておるか？」

「さあ……？」

さっぱり知らなかった。伝説のどの字も聞いたことがない。

村長はソファに腰を下ろす。

「仕方ない。では、教えてやろう。この村の名前、サラサの由来を知っておるか？実は、これはな。その昔この大陸に魔法を伝えたという偉大な魔導士、ビリカルが……」

じじいは嬉々として語りだした。

この手の老人は、普段若者としやべらない分一度話し出すときりがない。

ミーナは聞き流すことにした。

こうなるだろうと予測して、暇つぶしはちゃんと持ってきた。こないだ町に出たときに買ってきた本。森に囲まれたへんぴな村に住んでいるものだから、大陸の出来事を伝えてくれる本は大好きだ。

村長の話とは全然関係のないところでけらけら笑ったり、村長の話とはやっぱり全然関係ないところでへえ〜って声を上げたりしているうちに、村長の娘さんが起きてきた。娘さんといっても、このじじいの娘だからもうおばさんだ。

他にもこのじじいの家族が次々と起きてくる。

挨拶をかわして、再び本を読み始める。そうこうするうちにも老人の話は続いていた。

おばさんから朝食をふるまわれて、食後の紅茶を飲み始めたあたりでようやく長い長いお話は終わった。

もちろん、じじいの伝えたいことは誰も聞いてなかった。

「それで？ やっぱり買い物とかもしてきたんだろ？」

「うん。あ、でね。すごい発見しちゃったのよ。こないだ出荷したうちのミルクがさあ」

おばさんと少女は世間話にうち興じていた。話題は『こないだ行った町について』だ。

「ほら。おじいちゃんも早く朝ごはん済ましちゃってね。もうこんな時間なんだから」

おばさんがじじいのコップにミルクを注ぎ入れる。

「じゃあ、そろそろ行くね」

ミーナは席を立とうとする。牧場の手伝いの仕事が待っているのだ。

すると、話し終えておとなしくしていたじじいが突然立ち上がった。

「ならん！」

突然大声を出すもんだから、みんなびっくりした。
びびる一同を無視して、じじいはミーナの肩をがっしり掴んで言った。

「よいか！お主はこれから、北に向かうのだ！」

「とうとう追い詰めたぞ！魔王め！」

勇者は毅然と魔王をにらみつけた。

しかし、黒マントを身にまとった魔王は、少しも動じることなく高笑いを上げた。

「なにがおかしい！」

「おろかもものめ！これを見るがいい！」

そう言い放って、マントを翻す。

「な、何い！？」

マントに包まれて隠れていたのは、いたいけな少女だった。

「見たか！こっちには人質がいるのだ！」

「ひきょうものめ！」

ひるむ勇者様。笑う魔王。

「ゆうしゃさま！」

少女が声を上げる。

「私にかまわず、魔王をやっつけてください！」

涙ながらの叫び。勇者は心をずずんと揺り動かされた。
「うるさい！だまってる！」

魔王は少女の頭を小突いて黙らせようとした。
こつん！と思いのほか小気味のいい音がする。

「いたっ!？」

「あつ、ゴメン……!」

「何すんのよ！あとで覚えときなさいよ」

「わ、わざとじゃないんだけど、ついノリで……」

魔王はひるんだ。

その隙を勇者は見逃さなかった。

「今だ！」

勇者の手にした伝説の剣が、魔王の体を捉えた！

「ぐわああああ！そんなばかな〜！」

かくして、魔王は倒された！

「ああ、勇者様！」

「ふつ。この私にかればたやすいことだ」

自分のかつこよさに陶醉する勇者。その頭上に、大きな影がさした。

影はそのまま勇者の頭頂部に落下。

先ほどと同じような小気味のいい音がした。

「いてえ！」

節くれだった茶色い伝説の剣がからんと音を立てて落ちた。

「こら、リック！魔法の授業の時間でしょ！なにやってんの！」

勇者リックの母は、げんこつをふーふーしながら息子を怒鳴りつけた。

「そこのあんたたちも！授業が始まってるよ！」

「す、すいません！」

「すぐいきま〜す！」

魔王とその人質が駆け去って行く。

「ほら、あんたも行きな」

「……………」

「リック？」

少年はどこか懺然とした顔で母を見上げた。

「かあちゃん」

「何？」

「なんで、魔法なんか勉強しなくちゃならないんだ？俺、そんなの使わなくなつてなんでもできるんだぞ」

「ん」

母ちゃんは困った顔で首をひねった。

彼女らの住まうゴーウェ王国においては、十五までは魔法の習得が義務付けられている。

なぜかというと。

この国には深く魔法の使用が浸透している。

魔法技術はこの国の中において発展してきた。そのため、他の国では魔法教育に関してゴーウェ王国ほど行きわたった配慮ができていない。

明かりやら熱源やら、その他もろもろにわたって活用できる魔法を覚えられるのは、この国に生まれたものに与えられた特権と考えてよかった。

が、普通に暮らすのに魔法なんか必要ないという人もたくさんいる。

実際問題、炎を呼び出すことができ、水を作り出すことができ、風を起こすことができるばそれなりに便利に暮らせるものだ。

そしてそれくらいの技術は、普通十歳になる頃にはもう身に付けられるのだ。

今年十一歳になった息子の言い分も確かに一理ある。

それでも、彼女は息子をやさしく諭した。

「いい？リック。魔法をちゃんと勉強すれば、どこに行ってもそれなりの人間として認められるものなのよ。火が起こせるだけじゃ、ずっと小間使いとしてしか雇ってもらえないのよ？」

本当のところそんなことはないのだが、めんどくさかったのでウソをついておいた。

ガキの知識量なんてそんなもんだろう。

が、予想に反して少年は納得しなかった。

「でも、俺こないだ大工のおじさんの手伝いしたけど、魔法なんかいらないんだぜって言ってたぞ！」

こざかしいガキめ！

「うるさい！ごちゃごちゃ言っていないでさっさと学校行きなさい！」

突然の逆ギレ。かあちゃんの忍耐袋は驚くほど破れやすかった。

「ひっ！！！」

リックは逃げるように走り出した。

その後姿を見ながら、リックの母はちょっとしたノスタルジーに浸っていた。

（反抗するなんて。もうあんな大きくなったんだねえ）

陶醉しやすいところはさすが親子だった。

走りながらリックはある決心を固めていた。

（決めた！決めたぞ！）

今まで何度となくあのかあちゃんにこうやってやりこめられてきた。

もったくさんだ。

家を出てやるぜ！

プロローグ（後書き）

新しく連載を始めました。楽しんでいただけたらありがたいです。

のどかな原っぱの中の道を、馬が行く。

このクソ暑い日差しの中背中に重いものを乗せていながら、馬は嫌な顔ひとつ見せない。

たいしたやつだ。

そのたいした奴の上にのっかっていたのは、旅装束に身を固めた少女だった。

「あち……」

だらしないやつだ。

少女——ミーナは鞍にへばりつくようにしながらお馬さんに揺られていた。

「仕事サバれると思って来たけど……。失敗だったなあ」

村長は言った。

『いいか。よくきくのじゃ』

じじい、長話リピーターだ。しかしながら、全然二度目を苦にしている様子がない。

たぶん、二度目だと言うことを忘れてしまっているのだろう。じじいだから。

じじいの話を要約するところなる。

『サラサ村から北にいったところにあるタラスなんとかという町で真の勇者様を探し出し、村に連れて帰ること。期限は来月いっぱいまで』

もちろんミーナは話を全部聞いていたわけではない。部分部分を聞いただけだ。

この村の危機が、とか魔法使いがなんたらかんたらとかも言っていたが、聞いていなかった。

おばさんも、じじいの家族もなぜかこの突飛な命令に反対しなかった。それに、彼女自身『あ、サバれるかも!』という考えに取り

付かれています、特に疑念を抱かなかった。

「っていうか……真の勇者様って、なによ」

勇者。今朝読んでいた本にも出てきたが、不可解な存在だった。彼は洞窟に住まう邪悪な竜と戦い、姫様を救い出したのだという。しかしながら彼女は、洞窟に住まう竜も救い出される姫様も見ることがない。

タラスなんとかという町で、適当に見繕って連れてくればいいだろう。

彼女はその程度にしか考えていなかった。

「それにしてもあち……。水」

今の彼女は丈夫な革製の服装でがっちりキメていた。

腰についた水筒を取り出してひとあおぎ。生ぬるくなった水が口腔に流れ込んできた。

微妙に気持ち悪い。

「……っ」

ミーナはまた鞍にへばりつく女になった。

どれだけこんな旅が続くのだろうか。

まだ出発して半日も経っていないが、早くも弱気だ。

「こんなことなら来なきゃよかったかも」

ミーナはサラサ村の酪農牧場で手伝いをして生計を立てている。

両親は幼い頃に亡くなった。兄弟もいない。天涯孤独だ。

そんな彼女を拾ったのがその牧場主のグルカだった。

彼女の支えになったのはグルカだけではない。

村のみんなが彼女の力になってくれた。村長も、おばさんも。

日曜学校の友達も、その家族も。グルカの友人達も。

今は牧場の片隅に自分の小屋をつくって、そこに住み着いている。今朝、村長の家から帰るや否やグルカに事情を説明に行つて馬と旅装束を借り、颯爽と村を飛び出してきたわけなのだが。

「……………」

ミーナは今朝のことを思い出していた。

なんで自分が行くように言われたのだろうか？

ちゃんとじじいの話を聞いていればわかったことなのだろうが、もはやそれは仕方のないことである。そういえば、グルカも何も言わなかった。

「……ま、じじいだから」

どうせろくでもない理由なのだろう。

気にするだけ損なので、気にしないことにした。

「あゝ。あちいゝ」

うめくだけの女になった。

そんなミーナを乗せ、お馬さんはマイペースにぱっかぱっか行進していった。

ちょうどそのころ。

家出を決意した少年は自宅前まで戻ってきていた。

まずは自分の部屋に戻って、家を出る準備をするのだ。

だが、自分の部屋に行き着くまでにはある障害がある。

母ちゃんだ。

確か、母ちゃんは今リビングで縫い物をしていたと思う。

ここを何とかして突破しなければ、家出はできない！

夜にでも準備すりゃあいいだろ。

なんて冷静なコメントをしてくれる人はあいにくこの場にはいなかった。

こそこそと窓からリビングをのぞく。

「ん？」

母ちゃん、いないぞ。

ということは……

「チャ～ンス！」

リックは家に踏み込んだ！

リビングを抜け、慎重に様子を伺って階段に向かう。

気配はない。

「……よし！」

一気に自分の部屋へ。ドアを開け、するりと中に忍び込むと音を立てないようそつとドアを閉める。

うまくいったぜ！

スパイ気分のスリルの余韻にわくわくしながら振り返る。

そこにはもつとスリリングな展開が待っていた。

「あんた、なにしてんの？」

洗濯物を持ってきたとおぼしき母ちゃんは、本で見たどの化け物よりこわかった。

少年の家出は、もう少し後のことになりそうだ。

その夜、皆が寝静まった頃。

ひどく憔悴した様子の少年はへたくそな字で手紙を書いていた。あの後かあちゃんにみつちりこつてりと絞られたのだ。子供じゃなくてもぐったりしおれてしまうくらいものすごい剣幕だった。

しかしながら、それが逆にこの少年の反骨精神を燃え上がらせてしまったらしい。

目だけが変な光をららんと放っている。

『はいけい。とうちゃんかあちゃんへ。』

おれは旅にでることにした。いままでありがとう。』
身内でなけりや解読できないくらい汚い字だった。

ふと思いついて、書き足す。

『かえってきたら、きつとおれはすごいお金持ちになっているとおもう。』

そうしたら腹いっぱいらざにあとかうまいものをたべさせてあげる。

だからゆるしてください』

彼はラザニアが好物なのだ。もし彼が親なら、喜んで自分の子供を送り出すような手紙を書いたつもりだ。

そんなこんなで置手紙を書き終えると少年は机の脇に置いてあったバックを手にとった。

中には水筒やパン、お菓子など、主にリックの好物からセレクトされたアイテムがぎっしりと詰まっている。保存性とかいった言葉は見当たらなかった。

それを背中にしっかりと背負い、彼は立ち上がった。

納屋で調達してきた縄を窓の対面の柱に縛り付ける。強度を確かめて……よし。

縄の端を手にも、リックは窓を開け、淵に足をかけた。縄の端を階下のほうに垂らす。

夜の風が吹き込んできた。いよいよ、待ちに待った旅立ちのとき。

「……じゃあな、父ちゃん、かあちゃん」

かつこよく言い残し、窓の外に身を躍らせる。

でもやっぱり怖いので、そろそろと縄を伝って降りていく。

「もう少し……あっ!？」

手が滑る。

彼は尻を思い切り地面に叩きつけた。

「いつてえゝ!!」

夜中なので控えめに絶叫した。

「ううう。痛え」

尻が痛くて、立てない。

仕方ないので、そのまま這いずって移動を開始。

こうして、彼の一人旅は世にも情けない形でスタートした。

相変わらず、さんさんと日光は降り注ぐ。

そんな中、相変わらずだらしなくミーナは歩を進めていた。といっても、実際に歩いているのは馬だ。

「昨日寄った町で帽子でも買っとけばよかった」

鞍にへばりつきながら、彼女は後悔を漏らす。

こここのところ毎日、馬は彼女の愚痴を聞いていた。

人間だつたら「うるせえ！」とでも言つてるところだが、さすがは馬。文句ひとつない。

とにかく、彼女は相変わらずだった。

「……………」

購入した地図をしてみる。買った町の位置に赤で印が打つてある。そしてその印から十センチぐらい北のところに『タラスラント』という表記があつた。

「タラスラント……………」

聞いた話だと、ここから馬で二日ほどかかるらしい。

もつともそれは馬を走らせてのタイムなので、実際にはもつとかかりそうだった。

「…………冗談じゃない！」

何であたしが、こんな思いをしなくちゃならないのか！

「あゝもう！やめた！」

こんな思いするくらいだったら馬の世話してた方がマシよ！

確かに、この旅は結構な苦行なのだった。

朝から晩まで直射日光を真上から浴びなければいけない上、長時間馬に乗っているせいで体中が痛くなってくる。

お年頃の娘がやるようなことではないのだ。

帰るか？

「…………いや、待てよ」

『来月いっぱいまで』

村長の言葉が頭に浮かんだ。

「つてことは、来月いっぱいまでは帰らなくてもいいのよね」

彼女の頭にいい考えが浮かんだ。

いい考えは、同時にわかりやすい考えでもあつた。

この辺で遊びまくつて、来月終わごろに帰ればいいんだ！

勇者とやらは見つからなかったとか適当に誤魔化しておけばよし。なんなら、近くの村から適当に引っ張っていいいいし。

「…………へへ」

ミーナはニタニタした。
鞍にへばりついて行進しながらニタニタする女が誕生した。
とても不気味だ。目撃者がいないのが幸いだった。

「あの子、タラスラントに着いたかねえ？」

「さあ、どこかでサボってるんじゃないですか」

グルカはコーヒーをすすりながらこたえた。話し相手は村長とこのおばさんだ。

仕事の休憩中に、おばさんが作りすぎた煮物を持ってきてくれたのだ。

「そういえば、あの子は知ってるのかい？」

「……さあ？あの預言者がここに来たのって、確か十何年か前のことでしたよね」

「それなら、知らなくても無理はないかね」

「ま、村長の話を聞いてりゃわかるでしょ」

不幸なことに、これまでミーナがじじいの話を最後まで聞き通したことは一度もなかったりするのだった。

「それにしても、信じてたんですかね、村長は」

「どうだろうねえ。一月前になってようやく思い出すくらいだから」

「そういえば、なんでミーナなんですか？」

「……さあ？」

この村の人たちは、何事も深く考えない人種なのだ。

「…………ふわあ」

馬鹿でかいあくびをかまして、ミーナはベッドを降りた。

ご自慢のさらさらブロンドヘアはぐしゃぐしゃで見るに耐えない状態になっている。

彼女は起き出すと、とりあえず身支度を整えた。

着替えてから洗面台に向かい、水を作り出す魔法で洗面器に一杯ためてから顔を洗う。

サラサの村は高原の上のほうにあり、夏でも朝はかなり肌寒い。だから彼女は朝が大嫌いだったが、この辺まで来るとそうでもないらしい。水もそんなに冷たくないし。

折りよく、ドアがノックされる音。

「もしもし。起きてますか？」

「はい」

「ああ、おはようございます。朝ごはんできてますから、よろしければどうぞー」

なんとサービスの良い。

「ありがとー!」

朝からかしましく大声を上げる。

「さて…………」

ミーナは窓を開け放った。

そこには平和な朝の町の風景が広がっていた。
ハミルテン。

ミーナがたどり着いたこの町の名である。

ハミルテンの町は商業が盛んで、活気のあるそこそこ大きな町だ。ミーナが地図を購入した町から西に少し行ったところに位置している。

要は、遊ぶと決めたらさっそく横道にそれてきたわけだ。

昨日の夕方ごろに到着し、宿を探して一泊。

しばらくここに留まってのんびりゆっくり過ごすつもりだった。

ミーナは朝食を頂いてから朝の町へ散歩に出かけた。

ちなみに旅費は村長が相当な額を用意してくれた。結構な額になっているが、彼女は気にしていない。もらえるもんはもらっとくタイプなのだ。

「うーん。いいなあ」

露店が立ち並び通りを歩きながら、思わず独り言をもらす。

果物屋のおばさんが店を開ける支度をしている。

料理屋台の仕込みを二人の子供が手伝っている。

ジャグリングのパフォーマーが練習を始めている。

どれもこれも、活気に満ち溢れていた。

のどかな村で暮らしているミーナにとって、こういう町は憧れだった。

早くから営業しているジュース屋に声をかける。

「ちよつといい？」

「ああ、いらつしゃい」

ジュース屋はきれいなおねえちゃんだった。

「どれにする？」

「えーとねえ」

メニューを覗き込む。魅力的な文字がずらーと並んでいた。

「じゃあ、りんごとオレンジのミックスで」

「はい。ちよつと待ってね」

おねえさんは慣れた手つきでジュースを作り始めた。

「キミ、この辺の子じゃないね」

器械でりんごをすりつぶしながら、おねえさんが言ってくる。

「うん、南のほうから来たの」

「へへえ。珍しいね」

「ちよつとした観光だよ」

当初の目的は頭からすつとんでいた。

そうなの？と、おねえさんは言う。

「でもここらへんには、よその人が見て面白いものはあんまりないと思うんだけどなあ」

「そうなの？」

ミーナは聞き返した。この通りだけでも十分面白いと思っていたのだが。

「うん。これくらいの町は、いろんなところにあるしね」

「……そうね」

自分が相当なイナカから来たことを痛感する。

「……ならさ、どつか面白いものがあるところって知らない？」

「そうねえ……。北、かな。はい、どうぞ」

「ありがと。……北？」

ジューズを受け取って首を傾げる。言い方がなんだか抽象的だ。

「そ、北。タラスラントって知ってる？」

「……名前だけ知ってる」

「あそこ、国境の町だからね。いろいろあって面白いよ。人も物もね」

「うー」

微妙に複雑な心境でミーナはうなった。

行くのがイヤになって脇道に来たのに、タラスラントは面白いところらしいのだ。

行きたいような行きたくないような。

「どうしよかなあ」

ずるずるとジューズをすすする。

酸味がきいていて、それでいて甘みも強い。さわやかな口当た

りだ。

「おいし」

「そう？ありがと。まあ、ゆっくり決めなよ」

ジューズ屋のおねえさんはにこやかに言った。

結局、しばらくハミルテンに留まる事に決めた。まだ来たばかりで全然見て回っていないし、田舎者のミーナには十分面白いものがこの町にはあふれかえっているのだ。

上機嫌でミーナは商店街を闊歩する。

ガラス細工の工房やら、異国のものを売る店やらをひとしきり回った頃には、もう日が暮れかけていた。

そろそろ宿に戻ろう。

少し薄暗くなった道を、宿に向けて歩き出す。宿までの道のりはとても簡単だった。宿の正面に馬鹿でかい時計塔が立っていて、それが目印になる。

そして、宿まであと五分ほどのところの少し細い道で、彼女はそいつに出くわした。

一言で言えば、それは人間だった。背中にバ力でつかい荷物を背負った人間。

しかも、子供だ。十歳くらいの男の子。

薄暗くなった町の、ただでさえ薄暗い通り。あたりに人はいない。そういうところで、その子供はうつぶせになってぶっ倒れているわけだ。

「……うわ」

ミーナの発した言葉はそれだった。めんどくさそうなのが倒れてるよ。

ミーナの心中はこんな感じだった。

ものすごくイヤそうに眉をしかめて、そーっと覗き込む。

薄汚れた普段着。彼を押しつぶしている大きなリュックの口からは、腐ったりんごが転がり出ている。

たぶん、この町の子供ではないだろう。ミーナと同じに。

察するに、なんかの事情で家を出てきて、ここで力尽きて倒れたのだろう。

彼女はそう推測した。というか、それくらいしか思いつかなかった。

そこまで推測してから、そろそろと少年の脇を移動する。

関わり合いになりたくないオーラをじゃんじゃん発散していた。

無事忍び足で通過し、どっかで人に会ったら『そこにガキが倒れてるよ』とか言っとけばいいかな、とか、彼女が考え始めたその時。

「ん!？」

足が進まない。

右足が動かない。掴まれているような感覚だけがある。

イヤな予感とともに右足を見る。

足首を掴んでいる手は、ガキの体と繋がっていた。

ガキはさっきまで伏せていた顔を上げて、こちらを向いていた。

「た……助けて……」

うつろな目のまま、すぐるような声でそれだけを言って、再び『ガクッ』と顔を垂れた。

優しいお姉さんなら、きつと『なんてかわいそうな子なの！』とかいってパンでもめぐんであげるのだろう。

でも、彼女は決して優しいお姉さんではなかった。

「クソっ……！」

およそ女の子に似つかわしくないことを平気で口走る。

いまましい！とでも言いたそうな表情だ。

無理矢理引き剥がそうとするが、とれない。

ほんとに気、失ってるのか？

彼女がそう思ってしまうのも無理がないくらい、強い力がかかっている。

「……………」

仕方なく、そのまま強引に歩き出す。

やっぱりとれない。3mほど進んだだけで、かなり疲れてしまった。

「あー、もうー！」

ミーナのやるせなさが細い道にこたえました。

すごい勢いで、食べ物が消えていく。滝に流れ込んでいく水みた

いだ。

「おかわり！」

また一皿。また一皿。

「あのさ」

「おかわり！」

米粒をぶつ飛ばしながら、またまた注文。ミーナの声など聞こえていない様子だった。

「……まあいいか」

そうとだけ言っ、ミーナも自分の食事に戻った。

宿の一階にある食堂である。客は地元の人間が多く、それなりに賑わっている。

あのあと、結局このガキンちよは足首から手を離してくれなかった。

仕方ないので引きずったまま宿に帰ると、目を覚ました少年は腹が減ったと言い出す。

最初は無視していたのだが、部屋の前であまりにもうるさく騒ぎ立てるので、仕方なく晩飯を食わせてやっている、というわけだ。にぎやかな食堂の喧騒に背を向け、ミーナは黙々と食事に集中する。その目の前には皿の山ができていた。

「ふう〜。ああ、うまかった。ごちそうさま！ねえちゃん」

しばらくして少年が料理の大群を片付けた。

「ん？ああ」

ミーナはとづくに食べ終えていた。

「っていうか、あんた。名前、何？」

「俺はリックっていうんだ！」

先ほどとはうってかわって元気な声で自己紹介。

「はいはい。お住まいは？」

紙とペンを取り出して、ミーナは続けて質問する。

「この隣の、ミノアってところ」

「ミノア、と。あとなんか、身分を証明できるもの持ってる？」

「え？」

「それをあんたの知り合いに見せたら『ああ、リックのだ』って分かるような物」

「ああ。それならホラ、これ」

そう言つてリックは懷から手帳のようなものを取り出した。

「これ、学校の生徒手帳。ちゃんと名前も書いてあるよ」

「よしよし。じゃあそれ、預かつとくから」

「え？」

いぶかしむリックの手から、手帳がすつと掠め取られる。

「なんでだよ！返せ！」

「ああ？」

若干生意気な口をきいた少年を睨み付けるミーナの目は、すごい氣の弱い女の子なら、たぶん見ただけで泣き出すだろう。

リックもさすがに泣きはしなかったが、涙目になって『ごめんなさい……』と小さな声で謝った。

「ひよつとしておごつてもらえるのか思つてた？」

甘い甘い、と彼女は首を横に振った。半笑いだ。

「どうせあんたお金持つてないんでしょ？だつたら親にでももらうしかないじゃない」

あとは領収書もらえば完璧ね、とミーナは笑った。目の前で半泣きの少年などお構いなした。

リックは目の前が真つ暗になった。

どうしよう。

自分はどうやら、絶対に頼つてはいけない種類の人間にすがつてしまつたらしい。

「あ、あの」

「ん？何？」

悪魔が振り向いた。

「で、できればその、うちには言わないで」

「なんで？あ、そうか。家出中なんでしょ？」

「何で分かつたんだ!？」

説明なんか一言もしてないのに!

「そりゃあ、見りゃわかるよ」

「そ、それじゃ」

「あー、悪いけどダメね。だって親に言わなきゃ、誰も払ってくれないもんね」

「お願いします!なんでもしますから!」

「ダメだってば。どうせ役に立たないし、必要もないし」

「頼むから!」

「ダメ。明日そのミノアって町まで送ってってあげるから。大丈夫よ。手間賃安くしといてあげる」

「……………」

「ん?」

「……………ひつく」

なんでこのねえちゃんは、俺をこんなにもいじめるんだ。

「ちょ、ちよっと」

「ひつく……………」

ひどい。かあちゃんよりひどい。

「……………うつつ」

「あー、ちよっと」

俺、別に悪いことなんかしてないのに。

「泣かないでよ……………、ねえ」

「うつつうつつうつつ」

あんまりだ!あんまりだ!

「ほら、あたしのデザートのカークあげるから」

「うわああああああん!」

大爆発だ。もうしばらくはおさまりそうにない。

でももらったカークはちゃんと食べていた。食べながら大泣きしていた。

「うわああああああん!」

「あー、あの、その」

店内がなにやら変な雰囲気になった。ぼそぼそと他の客の会話が聞こえてくる。

「泣かしてるぜ。あんな年になつて」

「かわいそうに。何されたのかしら」

「あの女の子、相当ひどい性格してるんだな」

ミーナに周囲の視線が突き刺さる。とても痛い。

「分かった、分かったから、お願いだから泣き止んで！」

リックは耳を貸してくれなかった。

「うわああああああん！」

でかい声で泣き続ける家出少年。

おたおたする性悪娘。

野次馬たち。

こんな状況が三十分くらい続いた。

ミーナは完璧に悪者になった。

床は涙とケーキのかすでぐちゃぐちゃになった。

スズメの音がする。

ほんわかして、いい気持ち。目を閉じているのに視界は真っ白で、それがまたきれいだ。

「……うーん」

リックはむっくりと身を起こして、体を伸ばした。

朝だ。

あ、学校が。起きないと母ちゃんに怒られる。

ボケボケの頭でそう考えると、彼はかぶっていた布団を跳ね上げてベッドを降りた。

「……？」

何か違う。俺の部屋にテーブルなんかあったっけ？

こんな花瓶なんか置いてたっけ？

こんな女の人うちにいたっけ？

女の人……。

「うわああああ！」

リックの頭に現実が舞い戻ってきた。と同時に、彼は飛び退いてミーナから離れた。

ミーナは床にひざをついて、リックの寝ていたベッドにもたれかかって眠っていた。

「な、なんでこの姉ちゃんが」

そうは言ったものの、事情など説明するほどのことでもない。

泣きつかれて眠ってしまった彼を、ミーナが部屋まで連れてきたのだ。それだけだ。

しかし、リックはそんなこと知らない。また自分をいじめるつもりかと、彼はびびっていた。

「でも……」

リックはミーナの寝顔を覗き込んでみた。

結構かわいい。たぶんそれなりにモテるのではないか。

リックはちよつとドキドキした。十一歳とはいえ、彼も立派な男の子だ。

しかしながらどう動いていいのかが分からず、リックがその体勢のままおどおどしていると、ミーナが身じろぎした。身を起こして、眠そつに目をこする。

「むー……」

「あ……。お、起きた？」

リック少年がおそるおそる声をかけてみる。ミーナは目をぱちくりさせた。

直後、強烈な平手が飛んできた。かわすこともままならず、頬にクリーンヒットする。

くずおれる少年に、ミーナは叫んだ。

「なんであたしの部屋にいんのよ！」

自分が運び込んだことなど、頭から飛んでいる様子だった。

数刻後、二人は昨夜の食堂にいた。

片方は不機嫌な顔でトーストをかじっている。頬にもみじ型の跡がある。

もう片方は殊勝な顔で、やはりトーストをかじっていた。

「だから、悪かったってば」

「……べつに」

リックはまだぶすつとしている。

「……この、クソガキめ……」

ミーナはぼそつと言った。

これだからガキは嫌いなのだ。きつく言うとすぐ泣くし、甘くすれば調子に乗る。

まったく！

しばし無言でトーストをかじり、コーヒーは苦くて飲めないので牛乳で流し込んだ。

結局どっちもガキだ。

あまりほほえましくない食卓。しばらくして二人は朝食を終えた。

「……で、あんたはどうすんの」

ミーナが家出少年に尋ねる。

「考えてない」

「あんたね……」

本当に何も考えてなさそうな顔に、ミーナは脱力した。

「よくそんなんで、ここに来れたね……。となり町つつたって、地図で見たら馬でも二日はかかる距離よ、これ」

「まあね、すごいだろ！」

少年は胸を張った。しかし、その旅路で彼はすべてを失ってしまったのだ。

「言つとくけど、あたしは暇じゃないの。わかる？」

「……そうかあ？」

少なくとも昨日の彼女は、そこはかとなく暇そうに見えたのだが。「そうなの。だからね、あんたの相手をしてる暇もないって訳」

「ええ……」

「かわいそうだけど、そういうことよ。帰りの路銀ぐらい、貸しといてあげるから」

「……帰りたくない」

「あー、もう。何で？」

「かあちゃんが……」

彼の脳裏にはフライパンを振り回して猛り狂う母の姿があった。

『どこ行つてたの！罰として一週間飯抜き！』

顔色がさーっと青くなる。それを見てミーナはいぶかしんだ。

相当、実家で嫌なことでもあったのか。

彼女の脳裏にはめちゃくちやになった家庭事情が映った。

『なによ！えらそうなことはちゃんと稼いでから言ってほしいわ！』

『なんだと！俺だつてなあ！』

こないだ、本で読んだのだ。

「うー……」

不憫だが、かまってやる気はさらさらなかった。何よりめんどくさい。昨日だって周りの視線にいたたまれなくなって、いやいやリックを部屋に運んだだけなのだ。

ミーナは立ち上がった。ポケットから財布を取り出して、開く。

「ほら、これ」

リックの前に数枚の銀貨を置く。路銀には十分な量だ。

「じゃあね。それで家に帰るなりどっか行くなり、好きにしなさい」

彼女は少年に背を向けた。

少年は泣き出しそうな声で首を横に振っていた。

部屋に戻り荷物をまとめると、ミーナはさつさとチェックアウトを済ませて宿を出た。

本当はもっとこの町にいたかったが、ガキンちゃんにちよろちよろされてはたまらない。

ここ数日厩でのんびりしていた馬を引っ張って、彼女は再び旅に赴いた。

目指すはタラスラント。

ところが彼女は、街道に出て少しのところで歩を止めた。振り返って叫ぶ。

「なんでついてくんのよ！」

「好きにしるって言っただろ！」

ついてきた少年は、今回は負けじと言い返した。

ミーナは馬を駆けさせないので、徒歩でも十分ついて来れたのだ。「うざったいんだよ！特にガキは！」

とうとう本音が出た。そのまま、手綱をばしっと打つ。

普段のっそりとしてはいるがさすがは馬。命令に従順に、勢いをつけて走り始めた。

街道にはほかに通行人もいたので、スピードは控えめだが。

「あつ！待ってよ！」

リックも走り始めたが、すぐにすっころんだ。そのまま泣き始める。

「うわああああん！」

「あー、聞こえない！」

起き上がったリックは、大泣きしながらそれでも走って追いかけてきた。

何度も転んだ。何度も起き上がって走り出した。

両手を振り回して、顔をぐちゃぐちゃにして。

周囲の通行人が何事かと視線を向けて来る。

その様子を後ろ目に見ながら、ミーナは手綱を絞った。

馬の首を戻す。リックのところまでばかばかと歩かせた。

「悪かったよ。……だから、泣き止んで」

「うぐっ……。ひっく」

やっぱり、周囲の視線が痛い。

「……そりやまた、くだらねー理由だね……」

「そんなことない！」

あきれ果てた顔のミーナに、リックは唾を飛ばした。

彼が家出した経緯を説明していたのだ。まあ、一般的な反応だ。

「だって母ちゃんときたら、一回一回テストの結果だけでギヤーギヤーわめくんだぞ！」

「あつそ……」

ミーナはそっぽ向いて水筒の水をあおった。ちなみに今までどおり馬に乗っている。徒歩のスピードで。同行者は歩いていた。

「じゃあ、ねえちゃんはそのいうこと無かったのかよ」

「ないよ」

あるわけがない。両親は十年以上前にこの世を去っている。

そもそも、サラサの村には平日に通うような学校がない。平日、村の子供はだいたい家の手伝いで忙しく、日曜学校がその代わりとなっているのだが、魔法の習得などはそれで事足りる。だいたいそこまで小難しい魔法の理論など覚えても役に立たないので、やらないのだ。したがって一般的な学校のように成績を競ったりすることもないから、ガミガミ言われるようなこともない。

田舎では仕事を覚える方がはるかに大切なのだ。

「いいなあ」

羨望のまなざし。この年頃の少年に特有の理由で。

「そうかな。ま、いいんじゃないの？あんたの人生なんだし」

そしてこの娘は、親がいないことを悲観したりしないのだ。

記憶もおぼつかないような昔に両親は逝った。代わりに、気付けば隣にはグルカがいた。

実の父親ではないし、それは公言していた。

小さな頃は、それを男の子にからかわれたりもした。相応に傷ついたりもしたし、泣いてしまったこともあったけれど、彼女は負けなかった。その翌日には、その男の子をボコボコにしてやった。そうしたらグルカがほめてくれたのだ。うれしかった。

要は、心の持ちようなのだと今は思っている。

確かに、彼女は皆にあるものがない。でも、皆にはないものを自分を持つている。

そういうことだ。悲しむことなど何もない。

「ねえちゃんは何でタラスラントに行くんだ？」

「お仕事。ああ、めんどくさ」

ミーナは鞍にへばりついた。おなじみの光景である。

リックはそんな彼女を見上げた。朝はきれいなねえちゃんだったと思うが、こうしていると色気もへったくれもない。せつかくの容貌が台無しだ。

彼女自身は全く気にしていないが。

「仕事って、どんな？」

「人探しよ」

「人探し？誰を？」

「えーと……なんだっけ。勇者」

ああ、なんだかすごく恥ずかしい。でもいいや。どうせ本気で探す気なんかないのだから。

「ああ、勇者かあ」

「知ってんの？」

架空の人物じゃないのか？

「うん、最近有名になった勇者様がタラスラントにいるらしいよ。なんか、町を襲った化け物を退治したんだって」

「……ほんと？」

ガキの言うことだし、信用していいのか。

「ほんとだって。皆言ってたよ。聞いたことないの？」

「……………」

聞いたことがない。そりゃ、自分は確かに田舎育ちだし、村の外のことには疎いと思っていたけど。

あの本、本当のことが書いてあったのか？

「すごく強いんだって。化け物と戦って傷ひとつ負わずに一太刀で切り捨てたとか」

「へえ……」

どんどん、自分の知らない話だ。気分が滅入ってくるが、おもしろい。

「でもその勇者様は、女の人なんだって」

「え？」

本では、すごくハンサムな男の人ということだったのだが。

「ちなみに、名前とか」

「えーと……。確か、レイア。レイア・グライド」

バーのマスターは、浮かない顔でグラスをきゅっきゅとこすっていた。

憂鬱の原因は、カウンター席の隅っこに座っている女性だ。

気の強そうなまなざしの、美人。短い黒髪がそれによく似合っている。

黒いノースリーブに、これも黒いジーンズ。肩当をつけていて、それがまた妙に似合う。

さらに、腰には細身の剣をぶら下げていた。

その美女はジョッキのビールをぐんぐんとあおっている最中だった。

他にも客は結構いた。そこそこ人気のある店なのだ。

マスターはため息を吐き出した。人気のある店なのに……。

「おじさーん……。おかわりー」

凜とした声がふにやふにやになった感じで、彼女は追加注文した。どう見ても酔っ払いだ。

ビールがジョッキになみなみと注がれる。

「はい。あんまり、飲みすぎないでね」

気遣うというよりは、やめてくれよ！みたいなニュアンスをこめて、ジョッキを渡す。

でもこちらの言うことなど聞いてはくれなかった。一息に飲み干す。

マスターは店内を見回した。皆楽しそうに酒を飲んでいる。

ああ、かわいそうに。

目頭を押さえる。それとほぼ同時に、ジョッキがカウンターに叩きつけられる音。

「ふざけんじゃねーわよ！」

マスターを除く一同がびくりとして声の主を振り返った。声の主は、ジョッキを振り回している美女だ。マスターは耳を押さえてカウンターの向こうでうずくまっていた。

「何が勇者よ！あいつらさんざん持ち上げるだけ持ち上げといて、ちよつとしたらすぐポイ！何よ！あんた誰だっけ、って、何なのよ！」

激昂しておいて、今度は自分を大口開けて見つめる一同に目を向けた。

みんなすぐに視線を逸らしたが、遅かった。今度はそっちからんでいく。

「何よ。あんたまであたしに文句があるっての！？」

「いいえ、あの、その」

カップルの男につかみかかった。

……気に食わない。

「あたしの前でいちゃいちゃするなあ！」

「うわあああ！？」

がつしゃん！と、イスとグラスとその他もろもろを巻き込んでぶつ飛ばされた。

ぶつ飛んでいった席が大騒ぎになった。

「ああああ！むかつく！！」

そう言っていると彼女は手当たり次第に暴れ始めた。イスをひっくり返し、酒瓶を叩き割り、もうめちやくちゃだ。

「お、おいこら！やめろ！」

止めに入った勇敢な男性がいた。その彼に、女の鋭い視線が突き刺さる。

「あたしに……触るなあ！」

手が腰の剣に伸びた。

「げ！」

そんな喧騒に背を向けて、マスターはぶるぶる震えていた。彼女は先月あたりからふらりとここに来るようになった。

初めはいい感じの客だったのに。気付けばこんなことになっていた。

ひどい酒乱。その上めっぽう強く、おまけに佩刀している。

勘弁してください。もうこないで。

悲鳴がこだまする。怒号が飛び交う。騒音が響き渡る。

最終的に聞こえてきたのは女の笑い声だった。

「ひやははははは！あたしがルールだあ！」

牧場は相変わらず平和そのものだった。

グルカの牧場では馬だけでなく牛も飼っている。馬は騎馬として王国のが買っていったこともあるくらい質がよく、牛は牛でいい乳を出す。これは近くの町では大好評で、特にチーズがよく売れる。今のままではあんまりたくさん作れないのだが。

そんな感じで注文が結構入ったりするので、グルカは普段なにげに忙しい。ミーナが旅立ってしまってから村の子供たちに手伝わってもらっているが、こいつらがなかなか曲者だった。

「おい。こいつを倉庫に運んどいてくれないか」

グルカは牛の乳を搾っていた。栄養たっぷりの牛乳が詰まった金属の容器を、隣で見守っていた二人の少女に手渡す。

倉庫には特殊な魔方陣が敷いてある。搾った牛乳は火と水の魔法で殺菌消毒され、風の魔法で味の劣化を防ぐ処理をする。このへんが人気の秘訣だがいかんせん倉庫が狭いのでちよつとずつしか作れない。広くしたいのだが、魔方陣を広げるには専門知識がないのだ。

ちなみにチーズは普通に作る。

「うわー。ミルクだ」

「ほんとだ」

どうでもいいことに目を輝かせる姿は、ほほえましい光景なのだろう。普通は。

「頼んだよ」

なんだかどんよりした目で、グルカは二人を見た。

「うん。わかったー」

「まかせといてよ」

どんと胸を叩いて、二人して容器をえっちらおっちら運び始めた。牛舎を出る直前、片方の娘の目がにやりとゆがんだ。

小さな手が揺れる白き水面に突っ込まれ、勢いよく跳ね上げる。
おいしいミルクが片割れの女の子にひっかった。

「うわ！」

びっくりしながらもにつかりと不敵な笑みを浮かべる。

「やったなっ！」

ばしゃばしゃ。

「あはは！」

「このこの！」

二人はいたって楽しそうだったが、当然目的意識なんてものは頭からすっ飛んでいた。

「あああああ！？」

そんな様子に気付いたグル力は慌てて止めに入ったが、
「りゃー！」

熱中しすぎて、容器を持つ片方の手がぱつと離れた。

勢いよく大事な商品がぶちまけられ、牛舎の土を白く染め上げていく。

ごつい男は肩を震わせた。黒いオーラがほとばしる。

でもお子様はそんな様子にまるで気付いてくれなかった。目をぱちくりさせてお互い顔を見合すと、

「あははははは！」

「あははははは！」

パワフルな笑い声を爆発させた。

こうなったら大人の負けだ。グル力は思い切り肩を落とした。
ついでに泣いた。

「じゃあ明日もくるからねー！」

「ばいばーい」

ぶんぶん手を振って二人は帰って行った。やっぱり後片付けもしてくれなかった。

言い知れない悲しみに苛まれながらグル力は牛舎を掃除していた。

さつさと片付けないと次の仕事が遅くなってしまう。

「どうじゃ、子供たちは」

丸まった背中に声がかかった。振り返るとよぼよぼのじいさんが立っている。

「村長……」

グル力はじいいをにらみ上げた。

「あのね、村長。ミーナがいないから代わりに子供たちを手伝いによこしてくれたのはありがたいですよ。でもね、なんていうか俺一人でやったほうがまだマシというか」

「そうかそうか。それはよかったのう。子供たちも喜んでおったし」

このじいも子供といっしょだ、とグル力は思った。はたしてこいつがいまだに村長をやっていて、この村は大丈夫だろうか。

「そんな事より、ミーナから便りとかはないのかえ？」

「え、いや。ないですよ」

そんな事に気が回るような娘でもないだろう。

「そうか……。まだ勇者はみつかつとらんのか」

「ていうか、あんな預言者の言うこと信じてるんですか？」

「無論。ほれ、この牧場の隅に小さな祠があるじゃろ？」

「ああ、はい」

確かにある。古ぼけた、石の祠だ。

「彼はあの祠の中にあるものを当ててみせたのじゃ。村のもので、このわし以外知っているはずのないものを」

「……そうですか」

熱っぽく語るじいから、彼は目を逸らした。

実は知ってる。子供の頃かくれんぼをしていて、真っ先にそこに隠れたのだ。

中にはさびついたぼろぼろの剣が一振り、置いてあった。おもしろがって振り回していたら、さびた部分がぼつきり折れてしまったのだ。さすがに焦った。

グルカ少年は牧場から持ってきた牛乳を代わりに供えておいた。どうしようか必死に考えて出した結論は『なにか一番いいものを代わりにおいところ』だった。

そしてそれが自分ちの牛乳だったというわけだ。剣は近くに埋めておいた。

「うむ。あの者の言うことは正しい」

「ならなんで、今の今までなんにもしなかったんです？」

預言者が来たのは十五年前。グルカの犯行は二十数年前なので、確かに預言者はすごい奴なのかもしれないが、それにしては行動が遅い。

「忘れとつた」

まるで危機感を孕まない危機が迫っている。なにげに。

馬に乗った娘は、ばかでかい門を見上げて大口を開けた。連れの少年もそれにならう。

「……でつかいね」

「ほんとだ……。こんなでつかいなんて知らなかった」

少なくとも、ミーナは今までこんな大きな建造物を見たことがない。これがお城なんだぞと言われればそのまま信じてしまっただろう。

タラスラントはでかいと聞いてはいた。聞いてはいたが入り口の門だけでこれだと、もうおなかいっぱいだ。

そういう門に、次々と人が、馬が、馬車が吸い込まれていく。

田舎者が呆けていると、後ろの馬車からどやされた。

「さっさと行け！」

「す、すいません」

こんな調子で二人はタラスラントの町に足を踏み入れたのだった。

7（後書き）

わけあってペースがかなり落ちています。読んでくださっている方、
申し訳ありません！ぼちぼち続けていきます。

広い石畳の往来を、数え切れないほどの人が行く。

国境の町らしく、様々な格好があちこちで見かけられる。田舎者も見慣れた感じの服装をしている青年もいれば、全く異国風のおしゃれをしている女の人もいる。

そして一番ミーナの目に異常だったのは、鎧を着込んだ兵士の数だった。それ自体は見たこともあるのだが、ここには角を曲がるたびに出くわすような密度だ。

八百屋、肉屋、薬屋、服屋、レストラン、等等。道の両脇には多くの店が立ち並び、目の前の人の流れを自分のほうに向けようと必死に声を張り上げていた。通りを行く人々の喧騒が辺りを埋め尽くしている。

「いて！どこ見て歩いてんだ！」

「さあさあ、今ならパインが安いよ！」

「待つてよー！歩くの早いって！」

「ランチサービス実施中です！サラダがタダになりまーす！」

「おかあさーん！どこおー！？」

こんな感じの怒号が飛び交う中、田舎者の少女と家出少年は立ち尽くしていた。

二人は顔を見合わせた。

「ど、どうしょ？」

リックがおたおたと尋ねる。牧場の町、サラサ出身のミーナほどではないが、彼の実家とてこの大都市の前では所詮イナカだ。

「……えつと」

ミーナはとりあえず辺りを見回した。どこを向いても人がいる。それもたくさん。

こんな状況が今までであったらどうか。それにとんでもなくうるさ

いし。

彼女の感想を一言で言うなら『でかい』だ。

とにかく、でかいのだ。入るときにくぐった門に始まり、昨日の夜泊まった宿も、ただのレストランもどっかのお城かと思うくらいばかりでかい。

「とりあえず、人の少ないところに行こ。ここじゃ落ち着けないし」

ミーナはおずおずと歩き始めた。リックもそれに続く。

国境の町、タラスラント。

ハミルテンのお姉さんいわく『おもしろい』町だが、ちょっとついていけない。

なるべく人のいなさそうな道を選びながらしばらく歩くと、やつと二人は落ち着いた。

裏通り、とでも言うのか。狭い道は薄暗く、先ほどの大通りに比べて汚れている。そういう通りのあちこちに居酒屋の看板が掲げられていた。

「……なんか」

ミーナは小首をかしげた。

「ここもちょっと、違うなあ」

座って落ち着けるような店とかに入りたいと思っていたのだが、どうもそういう趣旨の店はなさそうだ。

リックはミーナの服のすそを引っ張った。

「ねえちゃん、戻ろうぜ」

「そだね」

振り返る。するとそこに人影があった。

ごつつい体格のつるつばげ、薄汚れた格好の人影だ。

狭い道、よけて通ろうとする二人の前に、そいつはずいっと立ちふさがった。

「おい、嬢ちゃん」

がらの悪い横柄な声。それを聞いてミーナはぴんときた。

これはあれだ。からまれた、っていうやつだ。本で読んだ。強面の男がか弱い女の子を脅すのだ。金を出せとか、俺のものになれとか。

「うわ……ホンモノだ」

「は？」

きょんとした目でそう言われても意味がわからない。

「あんな、ちよつと——」

「行くよ！」

男の言葉も終わらぬうち、ミーナはリックの手を引いて駆け出した。

「え、ねえちゃん!？」

「いいから逃げる！」

その場にはぽかんとした男が残された。

疾風のごとく、快足を飛ばす。裏通りの風景が走るように流れる。

「うわわ、ねえちゃん！」

リックが声を上げた。「追ってくるよ！」

振り返るとつるつぱげが走っている。迫ってくる。

「しつこいなあ！」

とにかく走る、走る。ハゲのほうが足が速い。距離が縮まってく。

「ヤバイヤバイ……ん!？」

揺れる視界の前方に、人影が見えた。

「たすけてー!!!」

なりふりなど構ってられない。ミーナは迷わず叫んだ。

その人物の足が止まった。黒い髪の女の人だ。腰に吊った細身の剣を引き抜き、こちらを向いている。

「助けてください！」

もう一度言つて、二人は女性の横を通り抜けた。彼女は口元で笑つて、空いている手で親指を突きたてて見せた。グーサインだ。

息を切らして男が駆けつけてくる。

「はあ、はあ……待てって言ってる……！」

その前に女性が進み出た。抜き身の剣が光る。

「な、なんだてめえは！」

刃物に少々びびりながらも、男は逃げたりしなかった。度胸のある奴なのかもしれない。

「関係ねえ奴はすつこんでろ！大体、お前誰だ！」

「……」

彼女の表情が微妙に変化した。笑顔だ。でも目だけ笑ってなくて、それがなんだか怖い。

「今、なんつった？」

「だから、てめえ一体誰だ！」

言った瞬間、刃がきらめいた。次の瞬間には、どさりと音を立てて男がくずおれる。

「峰打ちよ。安心しなさい」

かつこよく言い放つ。その背に、ミーナとリックが興奮した声を上げた。

「すっげえええええ！」

「かつこいいいいい！」

女性は髪をかき上げて、ふっと声を漏らした。なんとなく、気分がよさそうだ。

「ま……待て」

その背に、倒れた男から声がかかる。顔がぼこぼこにはれ上がり、全身青アザだらけでびくびくしている。峰打ちだが、割と容赦なくぶん殴られたらしい。

男はミーナを指差した。

「その……金髪の嬢ちゃん……」

「あ、あたし？」

「これ……落としたぞ……」

小さなポーチを差し出して、男はガクツと首を倒した。

「……」

「……」

言いようのない気まずさが漂う。

そんな空気の中、黒髪のおねえさんはビーチを男から取って、
「良かったね」

につこりと笑った。大物なのかもしれない。

「え、それじゃ、お姉さんが!？」

安っぽい食堂の一角で、ミーナは声を上げた。

同じテーブルにはリックともう一人、先ほど助けてくれたお姉さんがついている。正確に言えば、別に助けてもらったわけじゃないが。

「あの、町に入り込んだ化け物を退治したっていう……」

リックもびつくりした顔で、失礼にも対面のお姉さんに指を突きつけている。

当のお姉さんは、ニコニコしながらオムライスをばりばり頬張っていた。面と向かって指差されてもあんまり気にしていないようだ。でも、ミーナの一言でちよつと顔色を変えた。

「……名前なんだっけ？」

首をかしげる彼女の前に、デミグラスソースまみれのスプーンが突き出された。

「レイアよ。レイア・グライド」

依然ニコニコしたまま、でも変な迫力のある顔をずずいつと近寄せてお姉さんは名乗る。

少々気押されて、ミーナは首をかくかく振った。

「確か、リンダリアから入り込んできた化け物だったんだよね？
どうやってやつつけたの!? 教えて!」

まんまるだった目を今度はきらきらさせて、少年ががつついていく。勇者さまは満足げに、リックに向き直った。ちなみに、リンダリアはゴーウェ王国に隣接する小国、国境のすぐ向こう側だ。

「しょうがないわね」

とか言いながら、言いたくて仕方ない様子が顔にありありと出ている。黒い目が目の前のガキンちよと同じく、きらきらしているのだ。

あつけにとられているミーナをよそに、レイアは自分の武勇譚を語りだした。

「ほんの半年前の話よ。あたしはリンドリア出身の傭兵でね。あそこってあたしみたいなのには全然仕事ないから、ゴーウエに出稼ぎに来たわけよ」

あんまり勇者っぽくないエピソード。子供は素直だ。

「そんな話はどうでもいいから！どうなったの！？」

「……でね。丁度この国に入った時、ここにばかりかい犬みたいな化け物が入り込んできたのよ。この店よりでっかいやつ。魔法の暴走だとかいろいろ言われてるけど、なんでかは分かんないわ」

『犬』のような怪物は、たまにこうして町を襲う。しかし町の外をうろついているということではない。唐突に人里に現れるもの、というのが人々の認識だ。

要するに天災の一種なのだ、とレイアは説明した。ミーナが一人で旅をしていて、こういうのに出くわさなかったのはそういう理由があるからだ。

「それでそれで？どうやってやつつけたの！？」

勇者はふふんと笑って、腰に差した細身の剣を示した。

「こう見えても、あたしはリンドリアじゃ1、2を争う腕だったのよ。奴がまっすぐあたしに向かってきても、あたしは引かなかった。周りの皆がわれ先に逃げていく中、真っ向から立ち向かったわ。振り下ろされる爪をかわし、受け止め、あちこちに剣を突き立ててやったわ。でも奴はしぶとくて……」

意気揚々と語る。でもミーナは、もうちょっと別のことが気になっていた。

「……ていうか、なんでそんなすごい人が、いまだにこんな町にいるんですか？」

確かにタラスラントは都会だろうが、それだけの手柄があれば王都あたりで士官の話でもありそうなものなのに。

話の腰を折られて、レイアはちょっと顔をしかめた。と同時に誰に

も気付かれないくらい小さくため息をついた。

「王都に來ないか、って話なら山ほどあったわよ。軍に仕官しろとか、金持ちの私兵にならないか、とかね。でも、でもね……」

なんでも、その化け物を屠った手柄が認められ、ゴーウエとリンダリア、両国のお偉いさんから結構な報奨が出たとか。しかもこの町の連中が勇者だ勇者だともてはやすものだから、もう気持ちよくなくなってしまったという。

「通りを歩けば声をかけられて、サインをねだられて。金にも困らないし、最高だったわ。あたしは勝ち組だって、心からそう思った……けど、ここは国境の町なわけよ」

「どゆこと？」

首をかしげる二人。遠くを見るような目で、ぼつぼつと喋る勇者。

「家に帰ったとするじゃない。そしたらさ、いつまでも玄関に突っ立ってる？」

首を横に振る二人。レイアは虚無的な微笑を漏らした。

「そういうことよ。皆この町をスルーして、リンダリアなりゴーウエなりの中に入っていくの。人の流れって、ほんと早いもんだわ。」

たった半年で、出来た知り合いがみーんなくなっちゃうし……」
そうしていつしか、勇者レイアの名を知るものがこの町からほとんどいなくなってしまった。その代わりゴーウエ国内で、勇者の武勇を語るものが増えていったのだ。例えばリックの町のように。

「ちよつと前までは、皆あたしの名前知ってたのに、今じゃ皆『あんな誰？』って……。でも、あの日々が忘れらんなくて……ああ」

そうしてずるずるとこの町にいら続けている。人間の悲しいところだ。
「もういい加減、あきらめて王都にでも行こうかな……。でも、そこでも忘れられてたらどうしよう」

スプーンでコーヒーをかき回しながら、レイアは再びため息をついた。見ていてなんだか不憫だ。勇者なのに。
と、リックがミーナの服を引っ張ってくる。

「なに？」

「ねえちゃん、やったじゃんか！」

「は？何が？」

「だから、勇者探してたんだろ？」

ミーナははつとした。考えてみれば、これは渡りに舟状態なのだ。

「そうだった！……でもなあ」

正直、もつといろいろ見て回りたい。来たばかりなのだ。

……あとでいいか。

「あのー、レイアさん？」

「なに？」

遠い目でコーヒーズをずるずるすすっている勇者に声をかけた。さっきまであんなに元気に自分の武勇を語っていたのに、うそみたいにオーラが沈み込んでいる。

むちゃくちゃ言い出しづらい。

「え、えつとその……。よ、よかったら、この町を案内とか、してもらえませんか？」

とりあえずそう言ってみる。リックがまた服のすそを引っ張ってきた。

「村に連れて行くんじゃないの？」

「いいの。あんだだって、もつと遊んで帰りたいでしょ」

レイアは何回目かのため息を吐き出した。

「……あたしって、とうとう観光ガイドかなんかだと思われるくらいに落ちちゃったのかなあ……」

「あ、いや、そうじゃなくて」

「……まあ、いいか」

レイアは席を立った。

「ありがとうございます！」

続けて二人も席を立つ。

清算のところで、勇者がこっちを向いて手を突き出していた。

「食った分の代金」

勇者のくせに、いちいちせせこましい。

「じゃ、あたしはその角に家借りてるから、何かあったら来なさいね」

一通り町を回った後、日が沈みかけようかという時間帯。勇者はツアーを終えた。

「……そですか」

「んじゃねえ」

ぴらぴらと手を振って、レイアは二人に背を向けた。

「あれ、どこ行くんですか？」

家があると先ほど指差した方向とは逆の方向に足を向ける勇者に、ミーナは声をかけた。

「ああ、行きつけの飲み屋があんのよ。ちょっと前まで閉まってたんだけど、最近また店が開いたらいいからね。行く？」

ガキンちょ二人は首を横に振った。ちなみに店を閉めてた原因は勇者さまだ。

「ま、いいけどね。じゃ」

レイアの姿が通りに消えて、ミーナとリックは顔を見合わせた。

二人ともなんだかげんなりしている。でもそれも、無理のないことなのだ。

初めに連れて行かれたところは、競馬場だった。別に名物というわけでもなく、町の外れにぽつんと立っているようなところだ。もっさりしたおじさんばかりで割と盛り上がっていたが、二人にはあんまり面白くなかった。

ちなみにレイアは、買った馬券が大当たりして死ぬほど喜んでいった。

次に連れて行かれたのは賭場だった。

ここでもレイアは勝ちに勝ってご満悦だったが、やっぱり子供に

は面白くなかった。

その後もあれこれ連れて行かれたが、年頃の娘や少年には味の分らないものばかりだ。楽しかったのは闘技場で試合を観戦したときぐらいだろうか。ミーナがリングに上がろうとするのを、リックは必死で止めていた。

とにかく、期待したほど面白くはなかったわけだ。

「さ、宿に帰るか」

「だね」

今いるのはもといた大通りだが、人通りは若干少なくなっているだろうか。帰路に着く人間が多い。

「勇者か……。なんか、イメージと違うなあ」

「まあ、そんなもんじゃないのか」

十を少しばかり超えただけのクソガキは、悟りきったように言った。

「考えてみれば勇者だって人間だもん」

「にしたってなあ……」

彼女より勇者っぽい人格者はそこらじゅうにいそうな気がする。

「ま、明日は二人でぶらぶらしよう」

それで、表通りを十分堪能しよう。

そんなことを考えながら薄暗くなってきた大通りの流れに乗って歩いていると、背の高い人物とすれ違った。ぞろりとした服。深くフードをしているので顔は見えない。

「ミーナさん、ですね」

低く、かつ澄んだ声が彼女を呼んだ。振り返る。フードの男はこちらを向いていた。

「……あやしい……」

ぼそりと少年がつぶやいた。

「……ええと、ミーナさんですね？」

こくりとミーナはうなづいた。

「封印が、そろそろ弱まってきました」

「は？」

「早めに村に戻ることをお勧めしますよ。では」

「え、あ、ちよつと!？」

男の姿は雑踏の中に消えていった。ミーナはただ困惑するばかりだ。

「ま、待てつての! なんなのよ!」

しばらく男の消えたほうを見つめている。と、見えた。こちらを振り向いていた。

口元が笑っている。

……むかつく。

ミーナは足元の小石を拾い上げて、この人ごみにもかかわらず男めがけてぶん投げた。

「いてっ!？」

フードがぐらりと揺れた。当たったようだ。

「うつしゃ!！」

ガッツポーズをして歓喜する。さっきの話なんかもうどうでもよくなっていた。

南の高原に光が差した。一筋の、細い光が。

夜空を切って降りたその光は、高原の真ん中に突き刺さって消えた。

森の鳥達がざわめきだす。一斉に飛び立って、暗い空の色をよりいっそう濃くした。

当然、その森に囲まれた村の住民もそれに気づいていた。

サラサ村の村長は、夜中に起き出して窓の外を一瞥し、目を見開いた。

「なんと……」

高原の一部が、淡く輝いている。どこか不安をあおるような色で。

「……最近、尿が近くなったもんじゃ……」

おじいちゃんは気付いていないようだ。

「で、あんたは何者なの？」

レストランのテーブルにふんぞり返って、ミーナは男に尋ねた。フードを下ろすと、伸ばした茶髪がきれいな、結構な美青年だった。二十代半ばくらいだろうか。

「……普通こういう場合って、謎っぽく去っていくもんなのに」「何か言った？」

「いえ」

ハンバーグをめいっばい頬張ったミーナににらまれて、男は首をかくかく横に振った。

「……僕はビリクといいます。この町で占い師みたいなことやってます」

「占い師い……？」

うさんくさそうにミーナは眉をひそめる。彼女はこういう類のことを一切信用していない。大体、未来に起こることが分かるなら、不幸を見る人間なんかいないはずだ。

そう言つと、ビリクは笑って答えた。

「ま、絶対なんて保障はしてませんから。要は、相談に乗ってあげればいいんです」

「……いい商売だね」

もごもご口を動かして、ハンバーグを飲み下した。その横ではお子様が、やっぱりハンバーグをナイフで切っていた。うまく切れていないようで、せつかくのいい肉がぼろぼろになっている。

「とはいえ、一応僕もプロですからね。占星術やら何やらはちゃんと修めてますよ。占いってのは、これで結構技術がいるんです。例えば」

占い師は、お冷の入ったコップを傾けた。水がテーブルの上に円

を描く。

「なにやってんだ？おじさん」

「おじ……。まあ、見ててください」

ていうか、何でこのおじさんは敬語使ってたんだろうか？

リックがそんなことを考えていると、ビリックの指が水たまりの中央に運ばれた。そこから指を動かし、テーブルの上に何かを描いていく。

完成したのは、二人にはなんだかよく分からない紋章だった。

「水と時、あと空の紋章を組み合わせたものです。ここに……」

もごもご口を動かし続ける二人の前で、ビリックはなにことかぶつくさ言い始めた。

そしてしばらく経った後。二人がデザートプリンまで平らげたところで、ひとりごとが終了した。と同時に、紋章が淡く光を發した。

「……見ててくださいね」

ちよつとのどが乾いたのか、コップに残ったお冷をくいくいあおりながらビリックは微笑をこぼした。その指が發光する紋章を指す。

正確には、その上の中空を。

「……？」

指した指の先にぼんやりと何かが浮かび上がった。

「なにこれ？」

「さあ？ ミーナさんなら知ってるんじゃないですか？」

「はあ？」

よくよく覗き込んでみる。曇った鏡に映ったような何かの像がそこに浮かんでいる。

それは人間に見えた。大きな荷物を背負った、背の低い子供のような。うつぶせに倒れていて、顔はよく見えない。

「……これってまさか、こいつ？」

リックに指を突きつけながらビリックの顔を覗き込む。占い屋は肩をすくめて見せた。

「これは水鏡の術といって、人の記憶を鏡に映すようにして見せる技術です。これはミーナさんの記憶の中にあるものを映してみました。これはリック君と出会った場面ですね」

「へえ……。すげえかも」

ミーナが感嘆したような声を漏らした。その横でリックは浮かない顔をしていた。

「おれ、こんなだったのか……」

はたから見たら結構情けない姿だ。こんなもん見たくなかった。

「これにもう少し複雑な術法を加えると、少しばかり先のことを映すことができるんです。といっても、必ず当たるってわけじゃないですけどね」

心なしか得意げに、リックは言った。そこでふと、違和感を感じた。

周囲を見まわしてみる。

夕食時で集まったレストランのお客も従業員もみんなこつちを見ていた。

「すげえなあ。どうなってるんだ？」

「バカ、あれだよ。魔法つかってんだ。そうだろう？」

「へええ、たいしたもんだなあ、兄ちゃん」

わいのわいの、方々からいろんな人が声をかけてきて、リックはちよつとたじろいだ。

「え、いや、別になんかのショウとかじゃないんですけど」

恐る恐る言ってみる。

「そんなこと言うなって。なあなあ、俺のこととかも見れたりするの？」

「あ、私も映してほしいなあ」

「未来も見えるんだろ？　じゃあさ、ぼくっていつ結婚できるのかな？」

聞いてくれない。

やんなきゃ良かったかもしれない、と彼は思った。

「それで、村がどうのって言ってたけど。あたしのことも知ってたみたいだし」

ちよつと憔悴したビリクに、ミーナは質問を再開した。さっきまで、ほとんどマジックシヨウみたいな状態になっていたのだ。

おひねりまでもらってしまった。

「……ああ、あれは簡単な話で、僕だけにならわざわざ紋章術を使わなくても、他人の生い立ちやら、状況やらが分かるんです。もちろん、知りたいと意識すればの話ですけどね」

「ふうん……。じゃあ、村のことは？ 封印って何なの？」

「……長くなるから、かいつまんでお話ししましょうか」

占い屋はそう言って、一人だけ食べきっていなかったシチューを口に運びながら語り始めた。

「その昔、サラサの村があつた地には、大きな町がありました。ところがある日、その町に邪悪な悪魔が現れたのです。悪魔は無差別に町を蹂躪し、人々を不幸に陥れました」

「ふーん」

「その悪魔は、実に強大でした。人々には悪魔を傷つけることから出来なかつたといえます。町が滅ぼされんというとき、その地に一人の魔道士が現れました。その魔道士は悪魔と互角に戦い、そして最後に悪魔をその地に封じ込めることに成功しました。そこがサラサ村の中央です」

「はあ」

「魔道士はその地に石碑を立て、祠で覆って、悪魔の左胸を突き通した自らの剣を奉り、その町に住まうものに警告を与えました。嚴重にこの封印を管理しなければ、やがて悪魔はよみがえるであろう、と」

「ほお」

「しかし、人々はその町から一人、また一人と姿を消していったのです。悪魔の封印が残る地に住み続けたくない、というのがその

ものたちの気持ちだったのでしょうか」

「……」

「そして長い歳月が流れ、サラサの村の人々は封印のことを忘れ去ってしまいました。放置されっぱなしの封印は緩み始め、そろそろ限界が来てしまいます」

「……」

「そんな時、村に一人の預言者が現れました。彼は悪魔の封印のことを知っていました。そして、十と六になる娘を北の地に遣わせば、その娘は勇者を連れて帰り、復活してしまった悪魔を屠ることが出来るであろう、と、予言を告げたのです」

「……」

「これが、事の真相です」
ビリクは長話を終えて、息を吐き出し、二人の顔をうかがって見た。

二人とも目が閉じている。

というか、肝心のミーナは机に突っ伏して、あまつさえいびきをかいていた。

「……すみません、アイスクリームください」

占い屋はとりあえず追加注文した。そうでもしないと寂しくて死にそうだった。

「要するに、どういうこと?」

まったく悪びれない様子で、ミーナはビリクに尋ねた。まったくもって話にならない娘だ。さすがの占い屋もこめかみをひくひくさせている。

「だから、つまりですね。手短に言うと、サラサの村にとんでもない化け物が眠っていて、そいつがもうすぐ起きちゃうかもしれない、ってことです」

それでもちゃんと説明しなおしてくれるあたり、結構いいやつなのかもしれない。

「じゃあ、なんでおじさんはそんなこと知ってるんだ?」

「それは、おにいさんが占い師だからですよ」

「……うそくさ」

つぶやくリックをほつといて、ビリクはミーナに向き直った。

「で、ですねえ。僕がこうしてミーナさんに声をかけたのには、理由があるんです」

「……ナンパ?」

「あはは。まさか」

即答されてミーナはちよつとむっとした。それにこの占い屋が気付いたかどうか、彼はそのまま説明を続けた。

「何らかの理由で、封印が予定より早く緩み始めていました。一刻も早く、悪魔を倒せる力を持った勇者を連れて帰る必要があります」

ビリクはテーブルの上に描かれた紋章に少し手を加え、別の紋章を一つ書き上げた。

「何それ?」

いぶかしむ二人。占い屋は先ほどのように、独り言を言い始めた。

一般にはこれを『呪文』という。魔法を発現させるのに必須の技能だ。『言葉』を操って、世界の法則の裏を流れる『気』の力を望む方向へ誘導し、紋章やそれに準ずるものを介して世界に現す力。

「これを見てください」

指された先には、先ほどのように中空に浮かぶ像が現れていた。

広い高原の風景。夜の静かな牧場。

「……これって」

「なんだ？」

「サラサの村ですよ。ミーナさんの故郷の」

「……田舎だなあ」

リックがつぶやく。明かりも何にもない、どこまでも暗い原っぱのこの風景を見せられれば、誰だってそう思うだろう。

すると突然、鋭い光がその牧場を包み込んだ。かがり火なんていう生やさしいものではない。目を焼かんばかりのすさまじい閃光だ。この不鮮明な映像を通してでも、その強烈さは十分に伝わる。

店のテーブルの一角がそんなふうにビカビカ光っているもんだから、周りの人たちは迷惑そうに目を細めた。店にしてみたらすごく迷惑な客に違いない。

「……なに、これ？」

目を覆いながらミーナは尋ねた。その村で生活すること十七年、夜の牧場が光り始めたところなんか見たことないし、聞いたこともない。

「二日前の光景です。光は封印が限界に達している証拠。抑え込む力が光になって現れることは、通常はありません」

「ってことは……」

「そうです」

こくりとビリックはうなずいた。と同時に、映像がぱっと消えてしまふ。

「あれ？どうなったの？」

「封印の影響でしょう。魔法の力がかき乱されているせいで映像

が悪くて」

そういえば、さっきリックが映っていたやつより見づかった気がする。

「そういうわけで、急がなければなりません。ミーナさんだってずっと暮らしてきた村が消えてしまったら嫌でしょう?」

「そりやあまあ……、ねえ」

当たり前だが彼女にはサラサ以外に帰るところなんかない。何にもない場所だがなくなったらそれなりに困ってしまうだろう。

「もう、勇者は見つかっていますね?」

そう言われて、昼間勇者と遊び歩いた二人は顔を見合わせた。

「……勇者?」

「っていうか、来てくれるかなあ……」

なんにもない田舎の街を危機から救ったって、たいして名は上がらないだろう。謝礼だって大して出ないに違いない。そんなところに、はたしてあの勇者様が来てくれるだろうか。

「まあ、何とかして説得してください。そこに公園があつたでしょう。僕はそこで待ってますから。勇者を連れてすぐに来てください」

「なんで? 急ぐんならそんなことしてる暇はないんじゃないの?」

「ま、いいから。任せてみてください」

二人は顔を見合わせて、なんとなくうなずいてから席を立った。

ブリクは精算のところで、ミーナのはなつた言葉にぴくりと反応した。

「あ、お代はあそこの兄さんにつけといて」

「やだ」

ほとんど予想通りなのだが、ご立派な勇者様は少女の切なる願いを退けた。

「なんでこのあたしが、そんな田舎の化け物退治しなくちゃいけないってのお?」

ちよつと酒が入っているご様子だ。

「いやあ、それはその」

「あのねえ」

レイアさんはカウンターから体を二人に向けた。

「いい？ あたしはさ、この大都会で名を上げた勇者さまなんよ？
だからあ、いまさらそんな仕事片付けたってしょうがないじゃん。
どうせ金も出ないだろうしさあ、だったらいつそ王都に行って仕官
したほうが」

「お願いしますから、勇者様！」

ミーナはそれなりに気持ちをこめて言った。ほんとにそれなりに
しか気持ちがいもつていないという意味だが。

「ここで仕事しなかったら、勇者のイメージが悪くなりますよ？
最悪、バカにされるかも」

「……うつゝ」

確かにもうイメージはあんまりよくないが。というか、そのイメ
ージの存在すら怪しいものだが、何もしなければ消えてしまうので
はないか。

「でもなあ……。めんどくさいし、どうせなら一気に有名になれ
るような仕事がいいし」

この勇者様は、どつかミーナに通じるものがあるなあ、とリック
は思った。

「ね、王都までの道すがら、つてことで、どうですか？ 勇者様」

「お願いですから、勇者様！ 勇者様！」

「勇者様！ 勇者様！」

勇者さまコール。レイアの顔もだんだんにやけてくる。

そうだ。この感覚。忘れていたのはこの感覚なのだ。誰もが自分
をヨイショしてくれるこの快感。また味わいたい。

「……しょうがないなあ」

ニコニコしながら、勇者は椅子から立ち上がった。ジョッキを力
ウインターに叩きつけ、小銭をばらばらとその周りに降らせた。

「さ、行こうか、君達！」

酔っ払いなので持ち上げられればこんなもんだ。

連れだつて出て行つた三人を目で追つて、バーのマスターは拳を握り締めて小さくガッツポーズした。

原因は勇者さまだ。

「お、来ましたか」

公園に向かうと、もうそこにはビリクが待つていた。さつきレス
トランにいたときにはもっていなかったが、杖を左手に携えている。
辺りは真つ暗で、ひとけはほとんどない。少し離れたところにぽ
つぽつと家が建つていて、それがなんだか逆に不安感をあおつてい
るようだった。

「……誰こいつ。つていうか、なんでこんなとこ連れてくんの？」

うすい月明かりの中、レイアが思い切り占い屋を指差して失礼な
ことをのたまつた。

「えーと、あたし達にもよくはわからないんですけど」

「占い師ですよ。僕は」

「はあ……。で？」

訊かれてビリクは、杖を軽く振つて見せた。

「これから、少し大掛かりな魔術で皆さんをサラサに送ります。

一瞬で着きます」

「ええ！？」

そんな都合のいいもんがあつたとは。

「ただし、この術は年に何度かしか使えません。いつ使えるかも
分からないので、一般には知られていないわけですが」

「へえ」

「じゃ、そこに立つてください」

ビリクに誘導され、三人は公園の中央にある広場に移動した。よ
く見ると地面にはなんかの線が書いてあつて、複雑な模様が円の中
に描かれている。紋章とかいうやつか。

占い屋は先ほどのように呪文を唱え始めた。杖をくるくると振ると、紋章が淡く光る。

呪文がやんだ。

「向こうの状況ははっきり言ってよく分かりません。お気をつけて」

「ねえ、なんでこんなにしてくれるわけ？」

ミーナが素朴な疑問を口にする、彼は笑って答えた。

「お代はあとでいただきますに行きますよ」

「なに！？」

「では」

ミーナは大声で抗議の声を張り上げた。が、それは閃光と共に消え去った。

「グッドラック」

一瞬の出来事。

自分の周囲の世界が、まるで他と切り離されて落ちていくような感覚。

その切り離された世界を包むのは強烈な白い光。

ほんの一瞬の後、その光はすべてかき消え、周りは再び暗闇に支配された。

「な……、なに？」

状況が分からず、リックはたじろいでいた。その横では、レイアがさつきまでふにやふにやだった顔を引き締めて、なにやらあごに手を当てて思案していた。

「……かなり高度な転送術だね。こんなの、大魔導士が満月の日に出来るかできないか、くらいのもんなんだけど……」

そのどちらも、ミーナは聞いていなかった。

「あれって」

暗闇の中、それでも見慣れた風景がある。

牧場を取り囲む長い柵。

牧場の隅にある、巨大な木。

日曜学校の白い壁。

間違いなく、あの古い屋の言葉は真実だった。

サラサに帰ってきたのだ。

「マジで帰ってきちゃった……」

どつと後悔が押し寄せてきた。本当はもつと遊びまわってからのつもりだったのに、流れに流されて。

「あゝあ……。あ？」

見上げた月の輪郭が、欠けた。何かの音がする。はためくような、叫ぶような。

なにかがいる。

レイアもそれは感じ取ったようで、ミーナと同じようにそちらを見上げていた。

目を凝らしていると、それは段々と近づいてきた。声が、音が、大きくなっていく。

暗くて何かはよく見えない。月に照らされた影が見えるのみだ。が、そいつは間違いなく人ではなかった。鳥でもない、得体の知れない何か。とにかく、でかい。

「な、なんだ!？」

リックもようやくそれに気がついた、その次の瞬間。

轟音と共に、そいつは三人の目の前に降ってきた。

12（後書き）

たいへん間が空いてしまいました。読んでくださっているかた、ありがとうございます、そして大変申し訳ないです。

オチが決まっていなかったか、そういうことではありませんので、ちゃんと完結させる予定です。時間はかかっていますが、よろしければ。

「な……!?!」

「なんだあ!?!」

立ち上がる砂埃の中に、そいつは屹立していた。月影の中、その姿は青白く照らされて不気味な色に色づいていた。巨体がゆらりと動く。

突き出した鼻。小さくとがった平べったい耳。細い目。

「……ぶー」

鳴いた。

「ふんがっ!ふが!」

うなった。

「ねえ……レイアさん」

「んあ?」

「あれってさ、豚だよね?」

指差した先にいたのは、紛れもなく豚だった。ただしそれは顔面の話で、その体は豚のものとはとうてい言えないくらい巨大、人間みたいな手足があつて、あまつさえ翼が生えている。

あと、二本足で立つてる。

「……ひよつとして、こいつが悪魔?」

勇者のお姉さんに尋ねてみるが、肩をすくめて見せただけだった。

「くくく……愚かな」

「ええ!?!」

笑った。しゃべった。

「俺はあの方の臣下。あの方はこの忌まわしき地の封印を破り、まもなく復活されるのだ」

「……」

「……」

一同、言葉もない。その様子に、豚はおおいに満足した。

「くく……。よほど驚いたようだな」

するとミーナの指がその顔をまっすぐ指した。

「……す、すっげえ……」

「え？」

「いや、だつて。しゃべってるし。うわあ……」

単純に、豚がしゃべったことが驚きだったらしい。いや、常識的に考えたら、こっちのほうが自然なのか。

「……俺のことは、どうでもいい」

ずいっと豚が前に出た。迫力あるその動作に、ミーナとリックがたじろぐ。

そんな中、前に歩み出たものがいた。レイアだ。腰の剣に手を掛け、だるそうに豚を見上げる。

「ほお……。勇気があるな」

レイアさんは聞いていなかった。

「……いつまみになるわ」

剣を引き抜く。角煮、ローストなどわけのわからないことをつぶやき、まっすぐに構えた。

そういえば、この人酔っ払いだっとなとミーナは思い返した。つい数分前まで飲んでいたのだ。

「下がってな。解体はちよつとグロいからね」

ミーナとリックは顔を見合わせて、そそくさと下がった。やばいことが初まりそうなのがひしひしと感じられた。

「いい度胸だが、そんな剣では俺は斬れんぞ！」

豚の巨体が構えを取り、レイアに向かって巨体をつっ込ませた。丸太のような豪腕が彼女めがけて振り下ろされる。

一瞬。傍からは当たったかと見えるほどすれすれのところで、レイアはその腕を避けた。

「！」

巨大な拳が、今まで彼女のいたところの地面をぶん殴る。轟音。ミーナのいるところにまで衝撃が伝わってきた。

レイアはすばやく体を入れ、剣をまっすぐ構えて豚のわき腹に突きたてようとした。が、それはもう片方の腕によって弾かれた。そのまま腕が伸びてレイアの体を打ち払う。

見かけによらず鋭敏な動きだ。

「やるな、小娘」

「うざったい豚だね……」

なんとめんどくさいことか。これではいつまでたってもつまみが食えないではないか。

「だがそれも、人間にしては、だがな！」

またも巨体が突っ込んでくる。今度は頭を先にして、矢のようにまっすぐに。

再び間一髪のところでパス。すれ違いざま、尻を剣でなぎ払ってやった。

「ぎゃ！？」

バランスを崩して転倒。派手な砂埃が舞う。夜の村に轟音が響く。こんな夜中に、迷惑ではないだろうか。

「貴様……！」

怒りの声と共に、豚が立ち上がった。その声に反して、払われたはずの尻は浅い傷しかついていない。手ごたえ的にも、すっころぶほどのダメージがあつたとは思わないのだが。

ひよつとしたら、けっこう打たれ弱いのかもしれない。

「食らえ！」

豚の顔面が淡く発光した。

「！」

閃光。反射的にレイアはその場を飛び退いた。一条の光が走り、真っ黒な足跡を残した。

「よくかわしたなっ！」

さらに一発を放つ。これもかわしたが、肩当にわずかにかすった。見てみるとぼろぼろに炭化してしまっている。すごい威力だ。

すごい威力なのだが、ビームが鼻から出ている。かつこ悪さは隠

しようがない。

鼻から煙を出しながら、豚が三たび突っ込んできた。特大の右ストリートを剣で受け流す。耳元で風が揺れた。

流した力を支点にしてレイアはうえに飛び上がった。突き出されたままの右腕を蹴り上げて、さらにその上へ。

「!？」

両手で剣を構える。前のめりになる体をそのまま、真上から豚の背後に飛んだ。まっさかさまに落ちながら、豚の背中に思い切り剣を突き立てた。

「があ!？」

「えあ!？」

豚は悲鳴を上げたが、レイアも変な声を出した。

刺さらないのだ。剣先だけがわずかに背中を傷つけたが、筋肉の壁が刃を阻んだ。

レイアは着地して距離をとった。かなり予想外だ。

豚のほうはといえば、わなわなと体を震わせて、背中越しにレイアをにらみつけている。

「小娘……!」

すごく怒ってる。たいした傷もついてないのに。

そんな豚の怒りなどどこ吹く風で、レイアはぼやいていた。

「しゃあないか……。でも、めんどくさいなあ」

ぶつくさつぶやいているレイアに、豚が突進する。これまでにならぬほどの勢いで。

「死ねえっ!」

大気を震わせる一撃が叩き込まれた。避けない。モロに衝撃がぶち当たり、余剰な衝撃が大地を走り、木々を震わせ、大気を震わせた。風か、音かわからないものが、横で見ていた二人の鼓膜をびりびりと刺激する。

「うわあ!？」

「レイアさん!!」

砂埃。月の明かりの下、もうもうと立ち込めていて、豚の巨体すら見えない。

やがて聞こえてきたのは、豚の声だった。

「……ば、バカな!？」

巨大な拳の先にあったのは、剣。しかしそれは今までレイアが振るっていたものではなく、その数倍はあろうかという大剣だった。巨大な包丁のような、片刃の。半端でなく重そうなそれを支えているのは、勇者様の片手だけ。

「なんだ、これは!？」

「……勇者様愛用の剣」

「ふざけるなあっ!」

拳を引き、もう一撃を加えようとしたその巨体が吹き飛んだ。

「ぎゃあああっ!？」

ぶっ飛ばされた豚の右腕がなくなっている。とんでもない破壊力だ。

横なぎに払った大剣を両手で真上に構える。

「ち……ちくしょうが!」

豚の鼻が光る。ビームが吐き出された。

「……じゃね、おつまみ」

破壊の閃光が迫る。構えた剣を思い切り振り下ろす。

大剣が光をぶっ叩く。きしむような音と共に、閃光がはじき返された。

「うわあああ!？」

轟音、衝撃。そして、香ばしいにおい。

煙の中、豚は動かなくなっていた。

レイアはその亡骸に手を合わせ、ひとことつぶやいた。

「……いたーだきます」

ところがレイアが何かする前に、豚の体は砂のようにさらさらと崩れていた。

「えあ!？」

結局おつまみにはならなかったようだ。

「だまされた……」

なまじっかおいしそうな匂いがしていたぶん、悔しさもひとしおだ

「うわああああ！」

「すげええええ！」

タラスラントでちんぴら（親切な人）を追い払ったときとは比べ物にならないくらい、少年少女は感激した。すばやい動き、ド派手な立ち回り、豪快な一撃。やはり決め手は、片手のみで振り回している大剣だろうか。

「ねえ、それどーなってるの!？」

「ん？」

リックに訊かれて、レイアは剣をひよいと回して見せた。これまたカッコいい。

細身の剣が、いきなり人の背丈よりでかいくらいの大剣に変化した。あまつさえ、豚の放ったビームをはじき返してしまったのだ。すごい剣に違いない。

「勇者様愛用の剣」

「なんだよ、それ」

「特別な魔法だね。ま、すごい剣なのよ。これは」

「それじゃわかんねーよ」

「いーの。大体、こんなのはすごくもなにともないんだからさ、あたしにとっちゃ」

リックは追求したが、それ以上教えてくれる気はないらしい。

わいのわいのやっていると、ふとレイアの目が遠くの光に止まった。

ミーナの肩をつついて、それを示してみる。

「ねえ、あれなに？」

「え？あれは……」

牧場の柵に沿って、大きな木の方へ歩いていった先。

「えーと、あれです。あれ。村の集会所」

収穫祭とか、わりとメジャーな集まりが行われたりする広場だ。そうでないときには村民に有料で貸し出されているが、どこに払えばいいのか誰も知らなかった。

「……そういえば、あの占い屋の魔法で映ってたのって、あのへんだ」

「たしか、悪魔が封印されててピカピカひかってたところ？」

ミーナはこくりとうなづいた。レイアにはさっぱり分からなかったが、別に興味はなさそうにしている。いや、興味なんかほんとないんだけど。

問題は、その方角に光が見えるということだ。

「……行ってみますか」

何とはなしにレイアが言った。金になりそうもない仕事は早く終わらせるに限る。

二人も同意した。ミーナの先導のもと、柵に沿って歩き始める。

ただっぴろい高原。涼しい風。月明かり。

いやされる。

なんだか、レイアは眠くなってきた。

集会所に近づくにつれて、光の正体が見えてきた。

かがり火。映像で見た強烈な光ではなく、広場の中央に焚かれた火の光だった。

「なんか、人がいるよ」

ミーナの服のすそを引っ張ってリックが言った。指差すほうにはかがり火。それを囲むようにして、数人の人影が見えた。

「……あれは！」

ミーナは目を見開いた。あれは。あの、でっかい背中は。こつい体格のあごひげ男は。

「あ、姉ちゃん！？」

気付いたら、走り出していた。わき目も振らず。

まだ旅立って一月。たったそれだけだが、ずいぶん長い間離れて

いた気がする。本当に幼い頃から、毎日顔をつき合わせてきた養父。
「グルカーー!!」

叫んだ声に、人影が振り返った。逆光、表情はよく見えない。そんなことは全く気にせず、ミーナはその人物に飛び込んだ。

「……ミーナ!?」

「グルカ!」

大きな体が、視界一杯に広がって――

「このクソ親父!!」

蹴った。

顔面。思い切り。

グルカは仰向けにひっくり返った。涙がきらきら尾を引いて、哀れな表情が火に照らされる。

「何すんだ!」

当たり前だが、グルカは抗議した。

「うっさい! あんたは自警団長でしようが! あんたがしつかりしてないせいで、さっき豚みたいな化け物に襲われたんだぞ!」

「な……! あいつに!? そ、それで、無事か!? 怪我とか、してないか!？」

「ま、何とかなっただけさ」

「そうか……。そりゃ、よかった」

養父が胸をなでおろしているところに、よぼよぼの人影が近づいてきた。

「ミーナ、帰ったか!」

二人が振り向く。じじいだ。

じじいだけではなく、キャンプファイヤーを囲んでいた村の人たちも集まってくる。

「ミーナちゃん! 無事だったの」

「良かったあ。心配してたんだよ」

そんな労いの言葉の中、

「で、勇者は?」

単刀直入を体现したようなやり取りだが、じじいはとにかくそう言った。

「クソじじいが。っていうかその前に、今どうなってんの？」

いきなり豚に襲われたり、キャンプファイヤーやってたり。どうもこの村の状況が飲み込めない。

「どうもこうもねえさ」

肩をすくめてグルカが答えた。

「いきなり、化け物が何匹か現れてよ。牧場の周りとか、街道の入り口とか、塞いじまったんだ」

「襲つてこなかったの？」

普通、化け物の類は現れたら即、人を襲う。そんな化け物が数体で現れて、そうそう無事ですむとは思えない。ところが見たところ、建物なんかも無事のようだし。

「いやな、お前もあの豚に会ったなら知ってるだろ。あいつら、しゃべるんだ」

ミーナはこくんとうなづいた。あれは確かにびっくりした。

「そんでよ、儀式に協力しろ、と来た。俺らにも訳わかんねーんだが、とにかくこうして火たいてんのよ」

たぶんその、悪魔の手下だろうか。そいつらの儀式とくれば、きつとろくでもない。

そこでミーナははつとした。悪魔。豚。そいつの仲間の指示のもと、やらされてる儀式。

「あのさ。その化け物つて、どのくらいいるの？」

「俺が見たのは六匹だ。他のやつらの話を聞く限りじゃ、十匹以上はいるだろうなあ。このただっ広い村から出れねーくらいだからな。がはは」

「がははじゃねーだろ……」

さっきの豚もそのうちの一匹。だとすれば、まだ近くに化け物がいるかもしれない。

くいくいとじじいが服のすそを引っ張ってきた。

「で、で。勇者は？」

なんなんだ、こいつは。

心中そんな感じで、ミーナはレイアたちと歩いてきた方向の暗闇を指差そうとして、

「なんだ？ ユーシャあ？」

図太い声がした。ぴくりとみんなが一斉にそつちを見る。

ブルドッグ。

でっかいブルドッグが、そこにいた。首にはトゲトゲ、牙は鋭く、よだれがだらだら。

「儀式はすすんどるつてのに、何か企んどるかあ？ ああ？」

照明の暗さもあいまって、なんというか、とても化け物っぽい振る舞いだった。

すこまれて村長は首をぶんぶか横に振った。

「いえいえ！ とんでもな」

「ちよつと待ったあ！」

よく通る声。張り上げられたそれは、ゆっくりと暗闇から姿を現した。

「……子供？」

「あ、いや、違います」

指差されてリックはあわてて後ろに下がった。

姿を現したのは、ミーナの予見どおり、大剣を携えた勇者、レイア・グライドだった。

「さあ、みんなを解放しなさい！ クソ犬が！」

さっきとのテンションの違いにミーナはびっくりしたが、なんとなく納得した。

酔っ払いだしなあ。

「なんだ、お前はあ！」

ブルドッグがよだれをたらしながら、レイアに向き直った。

「あたしはね……」

なんか言いたくてうずうずしている。

が、そんな様子などお構いなしに、犬はレイアに飛び掛った。
「うがあああ！」
反則だ。

襲い来る特大ブルドッグ。巨大な牙がレイアの頭を噛み砕かんと
して――

「こっ……！この犬！」

ブーツが犬の鼻面を直撃した。信じがたいことに、犬の巨体が真
後ろに吹き飛んだ。

「ぎゃうっ！？」

悲鳴を上げて、犬はレイアと距離をとった。警戒している。

周りのみんなも、ぽかんとして両者を見ていた。当然だ。人の倍
くらいもでかいブルドッグの突進を足だけでぶっ飛ばしてしまった
のだから。

「ぐるるる……」

じりじりと、犬が距離を測って近づいていく。一足で飛びかかれ
る距離。

一方のレイアは、黙りこくって犬をにらみつけている。横から見
ていたのでみんなにはよく見えなかったのだが、このとき彼女は大
変こわい顔をしていた。

たぶん、子供が見たら泣く。

やがて、意を決したように犬が咆哮を上げた。

「死ねえええー！！」

飛び掛る。一瞬だった。

二者の体が交差したと見えた、その次の瞬間――

「がああああー！？」

ずずんと重い音を立て、巨体が地に落ちた。その体を縦半分にか
ち割られて。

豚のときと同じように、その体は砂のようになって崩れた。

「……おお」

観客の皆さんが、思い出したように声を上げた。感動の声というヤツか。

「ふっ」

賞賛をかなり期待して、レイアはそつちを見た。

「なんだ、あの犬。たいしたことないんだな」

「ほんとだ。脅かしやがって」

「なんか、バカバカしくなってきたよね」

口々にこんな言葉が飛び出す。

勇者様の微笑が凍りついた。

「……なんか、かわいそうだね」

「だなあ」

ミーナとリックの二人だけが、そんな彼女を哀れんでいた。哀れまれる勇者。情けない。

そこへ村長がやってきて、こう言った。

「で、勇者は？」

悪いことに、そのじじいの発言は当の勇者にも聞こえていた。

「うおー!!」

とうとう勇者さまは暴れ始めた。手当たり次第に大剣を叩きつけ、振り回し、しつちやかめつちやかだ。

「な、なんだ!?!」

「また化け物か!?!」

「いやあー! 助けて!」

そんな状況。勇者様はもう、笑うしかなかった。

「あはは、あはははは!」

で、満面の笑みで暴れ続けている。

「あぶないなあ……」

いろんな意味で。

で、数刻後。みんなにレイアが紹介された。

「えー、で、こちらがタラスラントから連れてきた勇者、レイア・

グライドさんです」

「……どーも」

ふてくされている。当然といえば当然なのだが。

ぱちぱちとまばらな拍手が起きた。超適当な態度だった。

「おお、あんたが勇者様か」

でもじいじだけは大いに喜んでいた。

「らしいね」

「で、いつ悪魔を退治してくれるんじゃ？」

「だからさ」

じいじの言葉に辟易したように、レイアは声を上げた。

「何のことかさっぱりわかんないっての。悪魔ってさっきの豚とか犬のことじゃないの？」

「わからん」

話にならない。

「あーもう！ちよつと、あんたら！説明してよね！」

連れてきた張本人の二人は顔を見合わせて、ミーナのほうがおずおずと口を開いた。

「えーと、つまりその。なんか、この村になんだかすごい化け物がいて、そいつがもうすぐ……復活？しちゃうのかもしれないとか、なんとか」

「そうなの？」

「うん。……たぶん」

実際帰ってきたら豚やら何やらが襲ってきたし、その豚がなんか復活するみたいなことを言ってたし、まあ合ってると思う。

というか、こんなにもいい加減な情報に乗ってここまでやってきたのだから、逆にすごいのかも知れない。

「……で、あたしはどうすりゃいいの」

「えーと、ですね」

それがわかってりゃなあ。

なにしろ占い屋が細かい説明もなしに強制送還したせいで、この

先どうなるのか詳しくはよくわからないのだ。

「ねえ、じーちゃん。なんか知らない？」

ミーナは村長に意見を求めてみた。言ってみれば事の元凶がこのじじいだ。

「しらん」

でもきっぱりと言い切った。

「預言者の言葉では、悪魔が復活するとかいってらんからな」

「クソったれが……」

なんて無責任な。

「まあ、落ち着け」

口を挟んだのはグル力だった。

「要するにだ。その、悪魔？そいつがこの地下だかどつかに眠ってて、そのうち復活しちゃうから、勇者様を呼んでやつつけてもらおう、って話だったんだろ？」

「うんうん」

「でも肝心の悪魔がないってコトなんだよなあ、つまりは？」

「そーいうことだね」

一同はうんうんとうなづいた。なんだかうまくまとめたグル力は満足げだったが、

「じゃあ結局、あたしはどうしたらいいの」

それがわかりやなあ。

全く進まない議場のなか、ミーナはおずおずと挙手した。

「あのさあ。化け物連中は悪魔の手下かなんだよね？」

「んー、そういえば、そんなこと言ってたかな」

グル力は上を見ながら回想した。

「なんて言ってたかな？名前忘れちゃったけど、様付けで誰かがどうのって言ってたぞ」

「っていうかあの豚、あの方の臣下だってはっきり言ってたけど」
リックが口を挟んだ。

「じゃああいつらは、いつ悪魔が復活するのか知ってるわけだし

よ
「

「たぶん」

ミーナは指をピンと立てた。

「だったらそいつらに聞けばいいんじゃないの？ どうしたらいい
か」

「はあ……」

ため息。

暗がりですひとり、彼は見張りを言いつけられて腐っていた。

ぱっと見は、気の弱そうな青年だ。

「なんだかなあ……。僕、ほんとはあの人あんまり好きじゃないんだけど」

そもそも、上司の命令とはいえどうして僕はこんなところにいるんだろう。

彼の名はミリオ。れっきとした悪魔の眷族で、下っ端その一だ。

その証拠に頭にはヤギみたいな角が二本突き出しているし、顔色だって青ざめまくっている。

言い方を変えれば、ただそれだけの特徴しかない。あとは人間とっしよだ。

顔もたいしてぱつとしてない。

「ああ……帰りたい」

「手伝おうか」

若い女の声。

世間突然、ぬつと無骨なものが突き出された。銀色ででかい。

鋭い角度と、重量感。

「ひえっ!？」

思わず彼は飛び退いた。が、飛び退いた体はがっちりとホールドされてしまった。すばやく羽交い絞めにされ、首筋に大剣が突きつけられる。

「ななな、なんだ!？」

「騒ぐな。殺すぞ」

大剣を持つ手の主が言う。背後なので姿は見えない。が、声には

言い知れない迫力があつた。
殺される。

「お、……お助けを」

「……なっさけないねえ。あんた化けモンでしょ？」
あきれた声で言う。

「そんな事言われても……」

抵抗したら殺すというのだ。逆らえるわけないじゃないか。

「……ま、いいわ。いい？騒ぐんじゃないよ」

そう言つて、女性は物騒なものをどけてくれた。拘束も解かれる。
「はあ、はあ」

ミリオはたいそう安堵したが、さっきまで背中に押し付けられていたやらかいものの感触を思い出してちよつと寂しくもなつた。
たいしたヤツなのかもしれない。

なんとなくレイアはそいつの後頭部をぶん殴つた。

「あいて！」

とつつかまえたミリオを縄でふん縛つて、レイア、ミーナ、グルカとリックの四人組は一旦集合した。

尋問のためだ。

「しつかしまあ」

レイアは剣を再びミリオに突きつけて、レイアは口を開いた。剣はいつの間にか、もとの細身に戻っている。

「ほんとに弱っちいね、あんた」

「う」

心なしか傷ついた様子でミリオはうつむく。

「化け物つていても、いろいろあるんだねえ」

ミーナはしきりに感心していた。仕方ないのかもしれない。なにしろ今まで遭遇してきたのはいかにもな豚や犬だけだったのだから。

「あ、はい。たいがいの人のもつと強そうな格好に生まれてくるんですけど、たまに僕みたいな姿になっちゃうこともあるんです」

縦社会の中で力のないものは、つらい役回りをさせられるのが常だ。

「そのせいで、昔からずっと下っ端でした。ご飯だって、ここ何年も肉が食べられないんですよ。はは、もう慣れちゃいましたけど」
力ない笑みに、グル力は言い知れない同情を覚えた。

「ううう……。かわいそうに」

「はいはい、そんなことはどーだっていいから」

レイアさんが釘を刺した。

「ちよつと、質問に答えてもらつよ。いい？」

「は、はい」

剣が首筋にすーっと近づいた。少しでも引けば、変な色の血が吹き出ることだろう。

「まず、ええと……」

で、ミーナに目配せする。結局のところ何を聞けばいいのかいまいち分かってない。

ミーナはちょこんと座って、そいつの顔を覗き込みながら尋ねた。

「えーと、な、名前は？」

「え、あ、僕、えと、ミリオです」

「そうじゃないだろ」

つつこみがリックから入る。

「だってさあ……。えーと、ミリオ？」

「は、はい」

なんとなく、ミリオの動きがぎくしゃくしていた。

「なんか、すごい悪魔が、この村のどっかで寝てるんだっけ？」

まわりの反応をうかがいながら、おずおずと質問する。質問の意図が明らかではない。

「そいつがもうすぐ復活するって聞いたんだけど」

「……それ、たぶんあの人のことだと思います」

彼らの住む世界は、魔界と呼ばれる。人の世と隔離された世界。

そこに住む彼らは、自らをその世界に封じ、人の世と交わることを硬く禁じていた。

決して良好とは言えないまでも、それなりの秩序を持って彼らの世界は存在し続けていた。

幾多の不満を含み。幾多の憎悪を抱え。

そんな世界に突如、彼は現れた。

魔界の異端者。

彼はそう呼ばれていた

秩序は乱れた。

彼に付き従い、その世界を変えようと蜂起した者も現れる。

彼の名はムニエル。

魔界の異端者、秩序の破壊神。

その名はムニエル。

「あの人、もてなかつたんですよ」
遠い目でミリオは語る。

魔界の王には四人の息子がいた。それぞれ眉目秀麗、一人として才覚にかけるものはおらず、民衆には慕われていた。

もう少し詳しく、簡単に言えば、女の子にもてた。

そして五十年ほど昔、王妃は五人目の息子を出産する。

この子は、ムニエルと名づけられた。

時を同じくして、魔界では静かに、王族への反感が募っていた。行政そのものに不満があつたわけではない。誰もが豊かに暮らせていたとは言えないが、それほどに生活が苦しかったわけではない。それでも確実に、不満を持つもののコミュニティは出来上がっていた。

王宮の中で何があつたのか、それを知るものは当事者以外、存在しない。

目に見える結果だけを言えば、ムニエルは魔界を追放された。理由は公には語られなかった。

しかし、民衆の目から見れば、それは一目瞭然だった。

「なんでなの？」

ミーナは持つてきたチーズを頬張りながらミリオにたずねた。

「まあ、見れば分かります」

「はあ」

人間界に追放されたムニエルは、人間として生きていくことを強

いられた。

もともと王族は人間とまるで変わらない外見を持っている。溶け込んでしまえば、普通に生きていくことはそう難しいことではなかった。

反乱分子の中心は、ムニエルが追放されたことを知るとその勢いを増した。

あの方をわれらが旗に。われらが王に。

彼らは魔界を渡り、ムニエルと接触した。

「っていうかさあ」

うんざりした声でレイアが口を挟んだ。

「そんなことどうだっていいっての。聞きたいのはこれからどうなるのかって事なんだけど」

細身の剣をすらりと引き抜く。

「ひっ……。ほ、放っておいてもムニエル様の封印はそろそろ解けるんです！ただ、儀式をやるとちよつとは早くなるってだけで」

「違う！」

切っ先が鼻を掠める。

「ひっ！」

「あたし達がこれからどうすりゃいいのか、ってきいてんの！復活って止めらんないわけ？」

「は、はい。たぶん」

舌打ちして、レイアは剣を振る。

「……なら、起き抜けをぶった切るしかないって事ね」

「そこまでしなくても……」

今度は切っ先が額にぴたりとつく。

「あたしの名誉がかかってんの！」

焦りすぎの感があったが、ミーナは何も言わなかった。

「で、そいつはどこ？」

「あ、あの広場です。たぶん」

指差した先には、ひときわ大きなかがり火が見えた。

「あれは……。牧場のど真ん中だ」

普段なら牛がのつぽり歩き回っているところだ。

「よし、行くぞ！」

勇者は剣を掲げて勝手に歩き始めた。

「あ、待って！」

その後を追ってリックやグルカも歩き始める。

地元民と悪魔の下っ端だけが取り残された。

「……どーする？あたしも行くけど」

「……怒られるのが怖いから、ぼくもついてっていいですか？」

「いいんじゃない？」

ちっちゃいやつだ。

牧場の中央。広大な丘の上に巨大な魔法陣が描かれ、それを取り囲むように八つのかがり火が焚かれている。

魔法陣は淡い緑に輝いていた。

「もうすぐだ」

魔法陣の中央にいる男が言った。

「もうすぐムニエル様が復活される。われらが御旗」

正面から見ると、ひげもじやのむさいおじさんだ。悪魔には見えないが、この男もれっきとした悪魔。この村を占拠した悪魔の集団を率いてきた。リーダーの位置にいる。

周りには取り巻きの悪魔が三匹。トカゲのような奴、サルみたいな奴、牛みたいな奴。どいつもこいつも二足歩行していた。

「……」

サルの化け物が、突然背後を振り向いた。

「どうした？」

ヒゲがたずねる。

「……かは」

目が見開かれ、その場にひざを付いた。

「な！？お前は！？」

銀色の線が、炎の色を照り返す。

「こんばんわ。悪魔の皆様」

くず折れたサルの背後から、炎を背にして歩み寄る影。

勇者、レイア・グライド。

「……人間か」

ヒゲが向き合った。

「そう。あんたらの親玉をぶった切りに来たよ」

まだ細身のままの剣を、まっすぐに突きつける。

三対の悪魔と一人の人間がそれぞれ身構えた。

「いい。動くな」

ヒゲは取り巻きの二匹を制した。

「この人間の相手は私がしよう」

下手すれば浮浪者みたいに見えるそいつは、静かに言って左手を一振り。

真つ黒な剣が唐突に現れた。

「行くぞ」

黒い剣線。すくい上げるような一撃を、勇者愛用の剣が受け止めた。まだ細身のままだ。

剣速が速い。

「やるじゃん！」

どこか楽しげに笑いながらレイアはそれを捌いた。

真上に跳ね上げた剣をまっすぐにヒゲの首筋に。飛び退ってかわされた切っ先をそのまま突き入れる。

おじさんの胸に届くその一瞬に――

「うあ！」

鋭い音と共に、見えない壁に阻まれたように弾かれた。思わず剣を取り落としてしまう。

「しまった……！」

ヒゲがにやりと笑う。

「お前達」

取り巻きに声をかける。

「お前達二人で、後ろを始末しておけ」

「……！」

「やばいって！ばれてる！」

かがり火のうしろ、遠くのほうに隠れていた三人と一匹はびくり

と身を震わせた。

足音が近づいてくる。そこへ響くレイアの声。

「みんな逃げて！」

「うあ、やべえぞ！」

あわてて立ち上がったところに、さらに勇者からのアドバイス。

「あとは自助努力でよろしく！」

助けに来てくれる気はないらしい。

「ちくしょう！逃げろ！」

グルカの一声で、一同は全力で駆け出した。

足音はさらに迫って来ていた。ドスドスという重い音と、ヒタヒタという妙な音と。

「助けに行かなくていいのか？まともに戦えるのはお前だけなのだろう」

むかつくぐらい落ち着き払った声色でヒゲが言う。ダンディーなおじ様がこの声ならそれはもうかつこいいのだろうが、ミスマツチがひどすぎる。これが人間だったら、確実に結婚などできないだろう。

「あんまり近くにいてもかえって危ないだろうしね」

「だがあの二人に追われている。捕まれば終わりだ」

「まあ、なんとか逃げ切ってくれるでしょ」

おやじは口元を緩めた。

「くく。冷たいのだな。仲間がどうなってもいいというのか」

「え、だって。仕事のほうが大事だし」

割と本気で言ってる。

「そうなの？」

「うん」

「……なんてやつだ」

いずれにしても、お互いのなすことは一つだ。

「だが、お前はもう丸腰だ。勝ち目はない」

するとレイアは、鼻で笑った。

「やってみな」

「ふ……」

すうつとおっさんが走る。まっすぐに剣を構えて、心臓を一突きにせんと。

黒い切っ先がレイアに迫る。

「はあっ、はあ」

ミーナはとにかく必死に走った。もともと足は速いほうだが、それが今何かの役に立つとは思えない。

そして悪いことに、グルカとリックの二人の姿が無い。はぐれてしまった。

振り向く余裕もない。足音は確実に迫ってきている。重厚な足音で、それがやけに怖い。

「た、助けてっ!」

「……あ?」

横を走る悪魔が発した言葉に、思わずスピードを緩めてしまう。

ミリオは必死の形相だ。

「だいたいなんであんだ、一緒になって逃げてんのっ!」

「だ、だって!」

「あいつらの仲間なんでしょ!」

「僕がみんなと一緒にいるところなんか見られたら、あとで何されるか!」

「そんなこと言っていないであんだ、説得してよ!」

「嫌だ!こわい!」

ぶんぶか首を横に振る。

「あ……!」

ミーナの足が石ころを引っ掛けた。バランスが崩れ、倒れこんでしまう。

足音。いつのまにか、すぐそこまで来ていた。

「え、ええつと」

おそろおそろ振り返ってみる。

「そんなに、逃げることはないだろ」

くぐもった声。月明かりに照らされるシルエット。

巨大な牛。帰ってきたそのときに遭遇した豚とイメージが重なった。

二足歩行でしゃべる。あいかわらずインパクト大のその姿。

分かっていることは、ただただピンチだということ。

「くそっ……！」

逃げ切れるだろうか。

へたりこんだまま、じりじりと後退しながら横目で周りを探る。

「……あえ？」

ミリオの姿がなくなっていた。

「……逃げやがった」

ただっぴろい牧場の丘陵を、これほど恨めしく思ったことは無かった。

グルカの隣ではちっこいガキがもたもたと走っている。娘とは離れ離れになってしまった。探しに行きたいところだが、そうもいかない。

「おい、ガキンちょ！乗れ！」

「あ！？」

グルカはリックを抱え上げて快足を飛ばす。どこへ逃げればいいのか、どうすればいいのか。

「はっ、はっ……」

「おっさん、どこいくんだ！？」

「知るか！」

怒鳴る。このガキはあんがい重たい。

「おい、お前なんかできないのか！？」

「できるか！おっさんのほつが強そうじゃなか！」

「ちくしょう!」

とにかく走る。ふと、牧場のすみっこにある祠が目止まる。

「……あれだ!」

「え?」

「ぼうず!」

「なに!?」

「化け物をぶつ倒せるかもしれんぞ!」

「ええ!?」

「うっ……」

木の陰に隠れてミリオは震えていた。

そっと顔を出してミーナの様子を伺う。

巨大な牛がじりじりと彼女に迫っていく。しりもちつきながら、

ミーナは後ずさりしていった。

どう見てもピンチだ。

「ああ……」

かわいそうだ。出来れば助けてあげたいが、自分はそれでも悪魔。ムニエル陣営側の人間（？）だ。助けに行けば後がこわい。

だがしかし、このままでは彼女はきつとえらいことになるだろう。それこそ子供には見せられないような。

懊悩しているうち、牛が彼女に飛び掛る。ひづめのぎらぎらした光が少女に迫る。

「あっ！」

間一髪ので、ミーナは横に飛び退いてかわした。

牛と距離が離れる。

「い、今だ！逃げろ！」

小声で声援を飛ばす。

しかしミーナは立ち上がらなかった。苦しそうに左のひざを押さええている。跳んだときすりむいたのだろうか。

振り返った牛が距離を詰める。正真正銘のピンチ。

「ああ……！」

なぜだか分からないが、こんなのはダメだ。ダメなのだ。

そうして気付いたときには、ミリオの体は木陰から飛び出していた。

「やめろ！」

足が勝手に駆け出した。牛がこちらを振り向く。

「……お前、ミリオじゃねえか。なんのつもりだ」

「そ、その子を」

ミリオは横目でミーナをちらりと見た。よろよろと立ち上がって、こちらを見ている。

「なんだ？ なにか言いたいこともあるのか、下っ端」

その一言で、彼の中の何かが切れた。

「その子をいじめないでください！」

下っ端根性が抜けてない。

「逆らうのか、下っ端が！」

いまや牛の注意は完全にこちらに向いている。

ミリオは叫んだ。

「今のうちに逃げて！」

でももうミーナの姿は視界から消えていた。

「えええ！？」

とにかく走って、グルカはミーナの住んでいる小屋にやってきた。さっきの祠はここからそう遠くない。

「な、なに、ここ」

「ミーナなんだ。ほれ、お前も探せ」

「なにを」

「スコップ」

リックには脈絡がさっぱり分らない。

「なんで？」

「いいから！」

大男とちびガキはそろって女の子のうちを搜索し始めた。

もともと物置小屋に増設しただけのスペース、彼女の家は半分くらい物置のままだ。

二人が部屋を引っ掻き回すまでもなく、部屋の中はぐちゃぐちゃだった。

「ほんとにこれ、女の子の部屋なのか」

リックはあきれたように言う。

ベッドの上、テーブルの上、床、とにかく物が散乱している。上着、下着、食器、本、等々。

「そのうちわかるさ。お前の理想が所詮は幻想なんだって事が」
遠い目でグルカは言った。スコップは見つからない。ミーナがこの間持つていったからここにあると踏んだのだが、見当違いだったか。

しばらくがそこそとやっている、リックの手が何かを探り当てた。

「あつた」

「ほんとか？」

追い求めたものがそこにあつた。

タンスの中に。

「……なんでこんなところにあるんだろ」

「さあ……」

かるいミステリーだ。

ヒゲの悪魔は自分の目を疑った。

黒い剣が消えていく。女の心臓につきたてたはずの刃が、まるで何かに食われているかのように消えていくのだ。

「バカな……！？」

目を見開いた顔面に、強烈な拳が直撃した。
吹き飛ぶ。

拳は握りこんだまま、ゆっくりとレイアは歩み寄ってくる。

「あたしの体はちよつと、特別だね」

「ま、魔法か」

「そう。高い金払っただけは、あるよね」

落ちていく剣を拾い上げる。と同時に、その剣は一瞬にして巨大な包丁のような大剣に変化した。

こともなげに片手でそれを操って、ヒゲのどもとに切っ先を突きつける。

「じゃ、さつさと悪魔を復活させて」

「くっ……」

最高に汚い嫌な汗が流れる。

「む、無理だ。封印は時間が来れば解けるが、われらの力だけで破れるほど脆弱なものではない」

「なんだ、そうなの」

驚くほどの予備知識の無さだ。

「だが、あの方を倒されるわけにはいかない！」

「！！」

見えない力が切っ先を跳ね上げた。

がら空きになった胴に、青い光をまとった拳が伸びて――

「がは！」

背中から大剣が生えていた。一瞬で。

「なんて、ことだ」

「相手が悪かったね」

目を見開いたまま、ヒゲは口を開いた。

「だが、それではあの方は倒せない……」

そうして、ヒゲもじゃ親父の体は砂となった。

「……さて、待つか」

追われてる人たちを助けに行く気はないらしい。

足が痛い。

「……ミリオ」

自分をかばってくれた悪魔。

「あたしは、こんなところでくたばっちゃいけない。あたしのために死んでくれたミリオのためにも」

勝手に死んだことにしてる。

痛む足を引きずりながら、彼女は考えていた。

このまま逃げたとしても、いつかは見つかってしまうだろう。それではいけない。せめて追ってくる牛だけでも何とかしなければ。

「痛っ！」

ただすりむいただけなのに大げさにひざを突く。

「くそ、なんか武器でもあれば」

小屋になんか探しに行くか？ だめだ、ここからでは遠い。落とし穴でも掘るか？ いやまさか、そんな暇はなからう。

「……落とし穴」

ひとつの考えが浮かんだ。だがはたして、うまくいくだろうか。ミーナは視線をあげた。いいのだ。どうせ何もしなければいつかつまづいてしまうのだから。

びたりと足を止めた。振り向く。五感を研ぎ澄ませる。

「……！」

重い足音。間違いない。あの牛だ。

っていうか早い。ミリオが全然役に立ってない。

目を凝らすと、何かがこちらに向かってくるのが見えた。拳を握り締める。

「さあ、来い」

「なにやってるんだ、おっさん」

「掘ってんだよ！見りゃ分かるんだろ！」

「そりゃ、わかるけど」

その通り、グルカは穴を掘っていた。場所はさっきの祠のすぐそばだ。

「落とし穴？」

「そうじゃねえ、探し物だ」

かつて自分が埋めた剣。御神刀としてこの祠に奉られていた一振り。

「なんでも大昔の魔法使いが造った剣で、いかにも利きそうなヤツなんだ」

ちよつとリックは不安を覚えた。そんないい加減なもので本当に大丈夫なのか。

それを口にとすると、グルカはこう返してきた。

「気にするな。どうせダメならそれまでなんだ」

この男は確かにミーナの義父なのだ。

「いいから、周り見張ってろ」

「う、うん」

あわてて辺りを見回す。いまのところ何の気配も感じられない。だが化け物は確実に近くにいる。それは間違いではない。いやな感じの沈黙が訪れた。

「……」

風の音がある。風にくすぐられた草木の音が。

「…… あった！」

「……！」

リックは思い切りびっくりした。

「こいつだ、見る！」

土を払い落としながら、なにか棒状の塊を大男が掲げた。

「なんか、めっちゃめっちゃさびついてない？」

「気にするな！」

ちよつとは気にしたほうがいいと思う。

じっくり見てみると、柄の部分には確かになんかの装飾がなされていた。昔はさぞ立派な宝剣だったのだろう。

「これで化け物のヤロウをたたつ斬ってやれるぞ！」

「……誰を、たたつ斬れるってえ？」

「……！」

祠の影に、何かがいる。ゆらりと月明かりのもとに姿を現した。トカゲの姿をした二本足。

「ウソだ！？ 気配なんか」

「足音立てるトカゲなんか見たこと無いだろう？ ひひ」

「……やっぱ、トカゲなんだな」

しゃきんと鐸鳴りの音がした。銀光が月明かりを返す。

「試してみなよ、おっさん」

「いくぜ、下がってな。ぼうず」

やる気マンマンでグルカは宝剣のなれのはてを構えた。

「……まだか」

勇者様はあくびを一つした。

ずっと待っているがなんの音沙汰も無い。いい加減復活して欲しいものだが。

「ヒマだ……」

時間があるならみんなを助けにでも行こうか。

「いや」

どうせ、どうにかなるのだ。自分が出て行ったところで結果が変わらないのなら、意味がないしめんどくさい。

「どうせなら、こっちも何とかして欲しいんだけど」

かがり火の向こうに声を投げかける。

なんの反応も無かった。

「……無視しやがるし」

見える。よろよろと頼りない動きで歩く小娘。

ムニエル直属の猛牛たる自分、たかが小娘一人をしとめるのに使われるのは気に入らないが、まあいい。

もともとあまり目は良くないが、月明かりのおかげで小娘の影はしつかりと見えた。

小さな小屋の中に入っていく。

「隠れたつもりか」

小屋ごと叩き潰してもいいが、どうせならもつと追い詰めてやろう。

でかい牛はいやらしく笑って、歩を進めた。

変な趣味でもあるのかも知れない。牛のくせに。

「しゃあっ！」

「うお！」

トカゲの剣がグルカを襲う。すばやい剣速、大男はすんでのころでそれを受け止めた。

力任せに払って、叩きつけるように古びた剣を振り回した。当たらない。

「くそ！」

飛び退って、トカゲは彼をあざ笑った。

「くはは。素人か」

「うるせえ！」

確かにごついが、グルカはただの牧場主だ。剣で戦ったことなんかない。

追いつがって、真上からの斬撃。これもトカゲは苦もなくかわす。
「死ね！」

「！」

思わず尻餅をついた。その頭上すれすれを、薄い刃と風が薙いでいく。

「ちっ」

そんな情けない姿勢のまま、とつさに剣を突く。

が、その必死の一撃は、横薙ぎの剣閃によって弾き飛ばされた。
「く！？」

ぼろぼろの宝剣が地に落ちる。

「終わりだな、おっさん」

甲高い声と共に、トカゲの口がにゅっとゆがむ。気持悪い。

その顔面に何かがヒットした。

「痛！」

石。

トカゲは視線を上げた。その先には、こちらを向いた子供の姿。

「逃げる、ぼうず！」

グルカは叫んだ。

「このクソガキ！」

トカゲが駆け出す。剣を構え、まっすぐに。

リックは動かない。

でかい体をかがませて、牛は小屋の中に足を踏み入れた。

暗い。いがいとつぶらな目を凝らしてみる。

特になにもない、がらんとした空間。片隅に透明なビンが散乱しており、飼葉がわずかばかり低く積まれている。

部屋は二つあるようで、扉が奥に見えた。

こちら側に少女の姿はない。とすると小娘は向こう側か。どうせあの様子では隠れおおせたとしても満足に逃げられはしまい。

「ん？」

あることに気付いた。扉は頑丈そうな鉄製で、その周りの壁も金属製なうえ、継ぎ目の一切ない造りになっているのだ。

なるほど、逃げ場としてはいいところを選んだ。

しかし、牛は口の端をゆがめた。こいつがすると大変気持ちの悪い光景だ。

その扉は、こちらからしか鍵のかけられない造りになっていたのだ。焦っていて気が回らなかったか。

牛は扉の正面に立ち、その拳を振り上げた。

金属のひしゃげる轟音。衝撃と共に扉は勢いよくぶち破られ、向こう側に開いた。

埃が舞い散る中、牛は悠然とした動きで扉をぐり、足を踏み入れる。

先ほどの部屋よりひときわ暗い。窓も一切なく、月の光が差し込む隙間もない。

部屋の真ん中辺りまで歩を進める。娘の姿はいたとしても見えない。鼻も利くほうではない。

「……どこだ！小娘！」

牛はイラついて地面をぶん殴った。悪魔のくせに、暗いのは嫌いだった。

その次の瞬間、牛の足元に、白く光る文様が浮かび上がった。

「！？」

飼葉の下に掘った穴から飛び出して、ミーナは鉄壁の脇についている白い石に手を触れた。早口に呪文を唱えると、石が光を発する。

——魔法陣の起動を確認。

扉の向こうで牛がなにかを騒ぎ立てている。真っ暗なせいで、何が起こっているのかさっぱり分かっていない様子だ。

石と呪文を介して、自らの意思を魔法陣に流し込む。

——制限を解除。出力を最大に。

ここは牛乳の殺菌処理施設だった。炎と風、水の魔法で牛乳を真空にパックし、菌を殺して味の劣化を防ぐためのもの。

グルカが生まれる以前から、この施設はあったそうだ。以前、魔

法屋を街から呼んでメンテナンスしてもらったとき、年代に見合わぬその精巧な造りに驚いていたのを見た記憶がある。

話によれば、もとはゴミかなにかの焼却場だったものを、殺菌にも使えるように調整したものであるらしい。わずかのゴミなら、一瞬で灰にできるほどの熱量を放射できる性能であるとか。

もし、今でもそれが使えるのなら。

——処理、開始。

開け放された鉄扉から、強烈な閃光があふれ出てきた。

「ぐあああああ!？」

牛の悲鳴が聞こえる。扉の向こうを蹂躪しているであろう膨大な熱量が、いつもは閉まっている扉を飛び越えて、ミーナのいる部屋に噴射された。

燃えやすいものしかない室内は、たちまち炎の海と化す。

「うあつ!？」

やばい。

迷わずミーナは、すぐそばの窓をぶち破って外に転げ出た。立ち止まらず、一目散に小屋に背を向けて逃げ出す。

しばらく走って、その場にへたり込む。振り返ると、小屋は炎上していた。

「はあ、はあ」

やった。牛を撃退したのだ。

そう、喜んだのもつかの間。炎上する小屋をシルエットに、なにかがその中から飛び出てきた。巨体。あちこちぼろぼろになりながら、まだ生きている。

「うそだ……」

炎の光に照らされて、牛は彼女の姿をすぐ捕捉した。

「……小娘が!この程度の罫で俺を殺せるとでも思ったか!」

叫んで、炎上する小屋を全力でぶん殴る。柱が折れ、一部が完全に崩壊した。

「動くなよ!今からひねり殺してやるから——」

牛の言葉が終わるのが先か、その声は耳をつんざく爆音によって
かき消された。

ぶん殴った衝撃のせいかな、装置が大爆発を起こしたのだ。

先ほどとは比べ物にならないくらい豪火。衝撃波は辺りの木々
の葉を引きちぎって枝を幹ごと揺さぶり、ミーナもいつしよになっ
て吹っ飛ばされた。

「うわあああ!？」

そして、炎に包まれながら猛烈な勢いで吹っ飛ばされる牛。その
まま近くにあった木に背中からぶち当たり、白目をむいて完全に沈
黙した。

ミーナはしばらくごろごろと転がって止まった。意識はある。全
身傷だらけで、激痛があちこちに走るが、生きている。

「うおお……いてて」

しばらくその場にうつ伏せで倒れこんだ。生きている、という実
感が湧いてくる。

「……行かないと」

そう、まだ何も終わってはいない。行かなければ。

振り下ろされる凶刃。リックは身動きすることを忘れたかのように立ちすくんで、それをただ見つめていた。

「ぼうず！」

グルカが叫ぶ。間に合わない。

トカゲの剣がリックの頭を両断するかと見えた、その瞬間。

リックの視界になにかが飛び込んできた。それと同時に、銀光が消える。

「うおっ！？」

右の前足を押さえて、トカゲは飛び退った。弾き飛ばされた剣は、真つ二つに折れて草むらに転がっている。

「なんだ！？誰だ、クソ！」

悪罵を投げつけるのは、剣を叩き折ったものが飛んできた先。月明かりのもと、誰かがいつの間にかそこにいた。

「……ミリオ？」

リックが声を投げかける。人型のぱつとしない悪魔は、ただ何も言わずそこに立っている。

「なんだと……！？この下っ端、人間に肩入れしやがるのか！」

両の前足を振りかざすトカゲ。その先端から、ナイフほどの長さに鋭く爪が伸びる。

ミリオは無表情にただ立っているだけだ。

「死ねえ！」

リックやグルカが止める間もなく、一瞬のうちに間合いを詰め、鋭い爪がミリオに襲い掛かった。

下っ端悪魔の体が、よろめいたかに見えた。爪は空を切る。

爪をかわされても、勢いは殺せない。体をぶち当てる。あっさりとミリオは吹き飛んだ。

地面に転がったところに覆いかぶさり、爪を振りかざす。

「ムニエル様を裏切った報いだ。大人しくあの世へ行きな！」
爪を振り下ろそうと、した。

「!？」

視界が一転。

何が起こったかもわからないまま、気付けばミリオが上に、上下が逆転していた。

「なん……だ？」

いつの間にか、長く伸びていたはずの爪が折れている。横で見ていた二人も、何がどうなったのか理解できずに茫然としていた。

「……心配はいりませんよ」

ぼそりと、小声でミリオが言う。

「な……てめえ！」

トカゲはミリオの体を跳ね除けようと体をよじる。

「か……体が!？」

戦慄。背筋が凍った。

動かない。指先ひとつすら、自分の意思に従ってくれない。

目を見開いて、ミリオを見た。下っ端で力も無いはずの人型悪魔は、ただ静かにその手を上げた。

「大丈夫、彼はちゃんと戻ってきますよ」

「か……うあ……」

声も、出ない。

「あなたと同じところへ、すぐ彼も行くことになります。新しい世界の構築は、ぜひそちらで」

ミリオの手のひらに光がとる。淡いオレンジに光るその光が、ひどく恐ろしく思えた。

「お……お……」

「では」

淡い光が唐突に広がって、閃光に変わる。トカゲの視界を強烈なオレンジ色が覆い、意識を奪っていく。

「お助けを……!!」

最期の言葉は誰にも聞かれることなく、光に包み込まれて消えた。

二人は啞然として、突如現れたヒーローを凝視していた。

「……ミリオ……だったっけ？」

「本人か……？」

先ほどまでとはあまりにギャップのある姿に、口をぱくぱくさせて質問する二人。

「……すみません。実は僕、王様がたのスパイでして。あ、王様って、魔界の王様の」

「あー……。そういえば悪魔って、魔界の王様から嫌われてるんだっけ」

「はい。さ、行きましょう。悪魔が復活しちゃいます」

「いや、お前も悪魔だろ」

「けどよ」

そこにグルカが口を挟んできた。

「俺らが行ったとして、何ができるってわけでもねえだろ？」

「そうでもないです」

あつさりとミリオは言う。まっすぐに、穴のすぐそばにある祠を指差した。

「あの祠の中。あそこに、古代の人間の魔道士が残した武器が入ってます。あれは人にしか扱えません」

「……俺らでつかえってことか」

リックは腕を組んでそちらを向く。ちびっこのくせに行動力はある少年だ。

「はい。少なくとも僕は触れることも出来ません。ですから最低、レイアさんに渡してもらう必要があるんです」

「わかった。任せといて」

勇んでちびっこが祠のほうに走っていく。そんな小さい背中を、グルカおじさんは口をぱくぱくさせて見送っていた。

「頼もしい子ですね。……どうしたんですか？」

「……あー、実は、だな」

冷や汗と共に、グルカが事の次第を説明しようとしたとき、

「ひっ！？」

そんな悲鳴が祠の中から聞こえてきた。グルカはその理由に心当たりがあつたが、それを言う前にミリオがリックのところへ向かつていた。

「どうしたんですか？」

ひよっこりと顔を出すリック。顔をこれでもかというくらいゆがめて、息苦しそうに口で呼吸していた。

「ミ、ミリオ。武器って」

その手元を、スパイ悪魔は覗き込む。そして、

「あ、はい。それっす」

「ええええ！？」

満足そうにうなずいたミリオに、今度はグルカが驚愕した。

「さ、行きましょう」

悪魔の背中を見て、リックはぼそりと思ったことをつぶやいた。

「触れないってこういうことかよ」

封印の場所。一人悪魔の復活を待つレイアは、つまらなさそうに剣をひゅんひゅん振り回していた。口が半開き、視線が定まっていない。本当にヒマそうな雰囲気をかもし出しまくっている。

ちなみに剣は元通り、細身のものに戻っていた。

「……転送術。封印の紋章」

ぶつぶつと独り言を言いながら、なおも剣を振る。なにかを考えているようで、なんにも考えていないようにも見えた。

「魔界の……王子。古代の魔道士……」

そのとき、地が震えた。

「！」

剣を振る手を止め、少し離れたところにある、封印の紋章を見やった。その中央、さっきまでヒゲもじゃのおっさんが立っていたところが、強い光を発した。

「いよいよ、来た？」

ぺろりと上唇を舐めるレイア。光は夜空に突き立つ槍のように真っ直ぐ伸び、辺りを異様な色彩に染め上げた。

みんながいなかったときに悪魔の復活。これで悪魔とやらがよわつく、もし瞬殺でもしてしまえば目撃者がいないということになる。名を売りたい勇者としてそれはちよつとまずいが、そのへん大丈夫だろうか。

そんな心配をしながら、勇者は剣を握る手に力をこめた。次の瞬間、その手に大剣が現れる。相変わらず一瞬の変化、レイア自身もその過程をちゃんと目撃したことはない。

光が強さを増した。

目が痛くなるくらいの刺激が網膜を襲う。地響き——いや、音。咆哮とも悲鳴ともつかない音が体に当たってくる。

これは期待が持てそうだ。

「さー、来い！できればみんなはやく、戻って来い！」

レイアの叫びと共に、あたり一帯が紫色の光に包み込まれた。

戦いとは元来、地味なものだ。

相手を圧倒するのに、派手なパフォーマンスや仰々しい台詞回しなどはいらない。必要なのは確実に敵の戦闘力を奪い、自分の身を守ること。剣舞は技の集大成、洗練された流水のごとき立ち回りはかいくぐってきた死線の数。

でも彼女は違った。とにかく派手に敵をぶつ倒し、観客に活躍をアピールする。タラスラントで化け物を切り捨てたとき、住民から飛んできたおひねりのすばらしさは今も脳裏に焼きついて離れない。惜しむらくは、危なそうだからといって村民が離れた集落に避難してしまったことだが、まだミーナたちがいる。目撃者が一人でもいれば、あとは首級でも持つていけばなんとでもなるだろう。

光が消えていく。

戻ってきた視界の先、魔法円の中央に人影。

「あんたが魔王、ムニエルだな！」

ビシッと大剣を突きつけて叫んだ。話を適当に聞いていたせいで肩書きがちよつと違う。

「寝起き早々で悪いが、この世界の安寧のため、人々の平和のため、そしてこのあたしの名声のため——」

そこで一度言葉を切る。

「ここであたしの剣に散——れ……？」

突きつけた剣の先つばが徐々に下がっていく。

晴れた視線の先、そこにいたのは——

いってみれば、でっぷり太ったおっさんだった。

「……なんで？なんでこんなことになるの？」

全身から力が抜けた。剣を取り落とし、ひざについて肩を震わせ、

目じりには涙すら浮かべていた。

およそ、勇者に似つかわしくない格好だ。

「こんな……こんなおっさんを張り倒して、いったい誰が喜ぶっていうの……!？」

髪をかき乱し、叫ぶ。パフォーマンス。それがすべてだったのに。再起をかけてここまで来たというのに、この仕打ち。これではあんまりではないか。

しかもそのおっさんは、半裸だった。

ブリーフ一丁のだらしない肢体、これではただの変態だ。悪魔なのに。

「……まてよ」

ひよつとしたら、人違いかもしれない。

「あのー……」

おそろおそろ、おっさんに声をかけてみる。おっさんはかすかにレイアを振り向いた。

「あなたの、お名前は……？」

「……ぼくの、なまえ」

おっさんが発した声は、はかなげな少年のものだった。

レイアの背筋を、ミミズが這いずるような悪寒が走る。あのヒゲ親父も声と見た目のミスマッチがひどいものだったが、これはさらにその上に行く。やばい。

我慢して次の言葉を促してみる。

「……で、その……。あの、名前……」

「……ムニエル」

「……!」

ハートが打ち砕かれた。

終わった。

「……おねえさん、大丈夫？」

ムニエルと名乗った半裸のおっさんが、心配そうに声をかけてきた。がつくりと肩を落とし、己の不運を嘆くレイア。突然、その目

がはつと見開かれた。

顔を上げ、辺りを見回す。まだ誰もここにはいない。今のうちにこいつを葬ってしまえば――

「あとは口八丁で、なんとかなるかも知れない……！」

その目がらんと光を放つ。わずかに生まれた名声への希望、失ったものは多いが今のうちなら何とかなるかもしれないのだ！

「……みんなはどこだろう……」

きよろきよろと周りを見渡しているムニエルを、レイアはちらりと一瞥してみた。

「……いける」

油断しまくっている。取り落とした剣に手を這わせ、ゆつくりと握り締めた。

意識を集中する。体に宿る、呪いとも言える魔法の力。呪文も紋章も必要とせず、意思の一つで力を生む。

すごい力ではあるが、使い方がこれまでずっと、ほめられたものではなかった。たぶんこれからもそうだろう。

そして今、これ以上ないくらいあくどい使い方をしようとしている。

「ゆるせ、悪魔！」

一瞬で地を駆ける。刹那、目の前にはふとったおっさんの姿、両の手には握り締めた大剣が。

「うらあああ！」

「あ」

『あ』

鉢合わせた三人と一人が最初に発した言葉はそれだった。

「あ……あなた……」

わなわなと口元に手を当ててミリオを指差すミーナ。旅装束はぼろぼろであちこち生傷だらけ、ついでに言つと顔も汚れてかわいそうなことになっている。

「あ、どもー」

にこやかに返した笑顔に、華麗な飛び膝蹴りが突き刺さる。青い鼻血を噴いて仰向けにのけぞる悪魔。あまりの早業に言葉もない。

「何一人で逃げようとしてんだよ！」

逃がしてもらった恩義も忘れ、この仕打ち。ひよっとしたらこれが彼女なりの心配の仕方なのかもしれない。

「ま……、待ってください……」

「うるさい！どこで何してたわけ！？こんなところほつつき歩いてる暇あつたらあたしを助けに来なさいよ！」

「え、あ、そうだ。無事だったんですか」

さらに叩き込まれる正拳。

「このクソ野郎！」

見かねてグル力が彼女を止める。今にもミリオを絞め殺しそうな形相で、殺気をあたりにまき散らしていた。

「落ち着け。こいつはこれでもなんか、スパイらしいんだ」

「すっばい……？何言つてんの？」

「いや、だから……」

「……もういいや」

ミーナは構えを解いてリックに向き直った。同時に顔をしかめて、

鼻の前で手のひらをはたはたと振る。

「で、あんたは何を持ってんの」

「きくな。武器だよ、武器」

「……武器い？」

たしかに武器になるかもしれないが。だいたいそんなものを持ち出さなくても、レイアがいればなんとかなるのではないか。

そう口にする、答えたのはミリオだった。

「保険というか、そんなものですよ。彼女がしくじったときのために」

そもそもあのレイアがしくじるような相手に、こんなものが通じるとは思えないのだが。

ミーナはじろりと、涼しい顔で説明するミリオを見た。

……むかつく。

鼻面に手のひらを叩き込むと、彼は再びあっけなくひっくり返る。予期せぬ攻撃には弱いらしい。

「ね、ねーちゃん。やめたほうがいいって」

がきんちよが忠告する。

「え？」

「ミリオって実はすげえ強いんだ。さっきも俺たちが襲われてたトカゲの化け物を一発でやつつけたんだぞ」

「うそだあ……。こいつが？」

となりでグルカも同意するが、疑いの目はなんら変わることがない。実際に目の当たりにしなければ信じられないようだ。まあ、それ以前のへたれな彼しか見ていないミーナが信じないのも当然といえば当然なのだが。

「……それがほんとなら」

じろりとうずくまったままの悪魔をにらむ。

「なんであの牛から逃げたりすんだよ！」

もはやぼろぼろになったブーツの底が、ミリオの後頭部をとらえた。

恐れを知らない。

視界を覆ったのは赤い光。

ただそれだけだ。それ以上のことは分からなかった。

次に気がついたとき、レイアは草原にうつぶせ、剣も取り落としてそばに転がっていた。

「な……？」

まだ見える、視界の端に赤い光。うずくまった体を起こすと、全身に鋭い痛みが走った。

「うあつ……！」

光の下、赤の一番濃いところに目をやる。そこには予想通り、ふとった中年の姿があった。

「……なんで、そんなことするの？」

悲しそうな声でレイアに語りかける。あいかわらずいい声をしている。といってそれが好ましいわけでもないが。

「なんで、おねえちゃんもぼくを……」

「くそっ……、こいつ」

強い。レイアにはそれがはっきりと分かる。城壁ですら断ち割るほどのこの剣を弾き飛ばし、あまつさえこの自分に『痛み』を与えてくれた。

それ自体が、彼女にとっては驚きだった。

魔法によって常に彼女には目に見えない『壁』がまとわりついていて。それは襲い掛かってくるものの『悪意』に特に敏感に反応し、自分に害をなそうとする力を逆に喰らう。

だから彼女は傷つかない。刃は体に届く前に消滅し、さらにその身のこなしは疾風のごとく的の攻撃をすり抜ける。

財産をなげうって得た魔術の力、それが打ち破られたということだ。

「さすが、悪魔ってことか……」

剣を拾い直す。油断なく悪魔を睨みつけ、隙をうかがう。

「……ぼくはただ、静かに暮らしたかっただけなのに……。人間と一緒に、なんにも不満なかったのに……」

なにごとかぶつぶつ言っている。隙だらけにも見えるムニエルは、しかし禍々しい空気をあたりにまき散らしていた。

レイアは動いた。

先ほどと同様、一瞬のうちにムニエルに肉薄し、その刃を振りかざす。

「らあっ！」

巨大な剣が薙いだのは、眼前の地面。砂が跳ね、土煙が巻き起り、両者の間に壁を作り出した。

回りこんで側方から刃を叩き込む。大剣はまた弾かれ、しかし先ほどのようにレイア自身が吹き飛ばされることはなかった。

「くっ！」

鉄の塊を叩いたような感触。

ゴリ押しでは勝てそうにない。悔しいが防御はこちらの攻撃を上回っている。

「やめて、おねえちゃん！」

叫び声。

今度は見えた。すさまじい衝撃波がレイアを襲い、なすすべなく再び吹き飛ばされる。草原が根こそぎ剥ぎ取られるような強烈な威力。

彼女はまた地面に叩きつけられた。這いつくばって、握り締めた剣に力をこめる。

くやしいが、本気になるしかない。

顔を起こしてみれば、ムニエルは遙か遠くに見える。そんなにまで遠くに飛ばされたのかと思うと、自分の体の丈夫さも相当なものだ。たとえ魔法に頼っていたとしても。

立ち上がって剣を構えた。久々に負った傷が痛む。ジーンズにも穴が開いてしまったし、服も汚れ放題。あとでこの辺の代金も請求しなければ。

そんなことを考えていると、ムニエルがこちらを向き直っていた。

「……なんで、おねえちゃんは僕を」

はかなげな声で呼びかけてくる。

「……仕事だし、気持悪いし。っていうか、おねえちゃんって呼ぶな」

ひどい勇者だ。

「……まただ……。またそうやってみんなは！」

「！」

悪魔の叫びと共に、彼を取り巻いていた赤い光が強さを増した。広がっていく赤。草原は血のような真紅に染まり、さらにその強さを増していく。

「うわあああああ！」

叫んでいるのは半裸のおっさんだ。

やっぱり気持悪い、とレイアは思う。

「お生まれになりました！男の子です！」

その知らせに、魔界の王は飛び上がって喜んだ。五人目の息子、国の安寧を預かる身ではあっても、やはりこういうのは単純に嬉しいものだ。

彼もその知らせに喜んだ。今までは兄弟の中で一番下、そんな自分に弟ができるのだ。お兄さん面して偉ぶることも、いい兄貴になつて一緒に遊んでやることも出来る。

王は部屋を飛び出していった。わが子の顔を一秒でも早く見たいのだろう、その足取りはせわしく、逸っているのがありありと見て取れた。とはいえ、彼も気持ちとしては同じようなものだったのだが。

父王に続いて部屋を出ようとした彼は、知らせを持ってきた侍女の様子がおかしいことに気付く。それは満面の喜色ではなく、不安顔と笑顔をない混ぜにしたような表情だったから。

「どうしたの？」

たずねる彼に、その侍女はこう答えた。

「いえ……、殿下もはやく弟君のもとへ」

いぶかしみながらも彼は父の後を追った。

広い宮殿の中、目的の部屋にたどり着く。そこには三人の兄もすでにいて、部屋の前で待っていた。

「どうしたの？」

侍女にしたのと全く同じ質問をする。彼らは何も言わず、ただ首を横に振った。

父の背中が見える。その向こうにはベッドと医師の姿が。ベッドには母が寝ているはずだ。

大きな背中に阻まれて、生まれたばかりであろう赤ちゃんの姿は

見えなかった。ひよっこりと父の脇から顔を出しているのはその足だけ。

父の背中が、震えていた。

どうしたんだろう。

かれはいぶかしんで、父に声をかけようとした。

そのとき、気付いたのだ。ここから見える、おそらく赤ちゃんのものであるう足。そのすねの辺りを、黒い何かがもじやもじやと覆いつくしているのだ。

「……え？」

わなわなと震える父の背中。厳格な魔界の王は、震える声を隠そうともせず叫んだ。

「なんじゃ、こりゃあ！」

赤い草原。嵐のような風がうなりを上げ、地はおののくかのよう揺れる。

そんな中、レイアは微動だにせず大剣を真つ直ぐムニエルに向けた。

悪魔の視線は完全に彼女を向いている。

「みんなはどこ！？」

「さあね」

先ほどとはうって変わって冷静な声。それはムニエルをいらだたせる。

「答えて！おねえちゃん」

「だからそうやって呼ぶな」

冷ややかな目でおっさんを見据え、なおも動かないレイア。

「教えてくれないなら……力づくでも！」

こういう思想は悪魔らしいのか。ムニエルが片手を天にかざすと、彼を取り巻いていた赤い光が収束を始める。

「……なんだ？」

いぶかしみながらも、レイアは動かない。ただ剣を握り締め、ム

ニエルを睨みつけるだけだ。

赤がムニエルを包み込んだ。豪風はいつそう強さを増し、彼を中心に竜巻のような風の柱が立ち上がってその姿を覆った。

「うあああああ！」

さわやかな少年の叫び声。でもレイアはそれがパチもんだと知っている。

光と風の収束が収まってきた。徐々にあらわになる悪魔の姿を、月が照らし出す。

半裸ではなかった。ちゃんとした——かどうかは知らないが、とにかく真っ黒なマントで体を覆い、ぽっこり出たお腹が目立たなくなったムニエル。

「ぼくをいじめないで……！」

「……」

何も言わず、レイアは意識を集中させる。剣の力、自分の魔法の力、すべてを最大限に引き出すために。

ありったけの威力を込めた一撃。それしかこの変態をしとめる方法はない。彼女はそう判断していた。そもそも、それまで叩き斬ってきた化け物どもと、この中年は格が違う。

大剣が薄く発光した。

祖国リンダリアで兵隊をやっていた際、偶然見つけた武器庫の隠し扉の奥にあった逸品。高そうだからと何も考えずに拝借したはいが、武器屋の知り合いに見てもらったところこれは禁呪の宿る剣なのだそうだ。なんでそんなものがお国にあったのか、いまだに分からない。不思議とお咎めもないのでほったらかしにしている。

それはさておき、剣の燐光は魔法力の飽和を示す。本気でぶつければどうなるか、レイア自身にも分からなかった。

まあ、そのときはそのときだ。

ムニエルのマントがはためく。炎が突然現れ、彼の周囲で渦を巻いた。

「……おねえちゃん、降参して」

「大人しくぶっ飛ばされてくれば、考えてやってもいいよ」
勇者は剣を握る手に力を込める。口の端を吊り上げて笑って見せた。

「あとちよつとだ！」

グルカとリックは元気よく、赤い光とつむじ風の巻き起こる草原の広場へ歩を進める。

そのうしろではミーナが悪魔のスパイにおぶってもらっていた。足が痛いから、とミーナは説明したが、だれもが心の中で『歩いてたじゃん』と思っていた。

「ねえ」

「なんですか？」

ミーナは赤い光の柱を眺めながらミリオに尋ねた。

「その悪魔……ムニエルだっけ。なんで追い出されたの？」

「それは……」

すこし、ミリオは口ごもる。

「……まあ、彼の外見を見れば分かることなんですけど。たとえば、犬が猫を生んだとしたら、どう思いますか？」

「え？そりゃあ……変だね」

「そうです。変なんです。どう考えても、おかしい」

「で、なんか関係あるの？」

「……次の質問です」

歩を進めながらミリオは言う。豪風は広場に近づくにつれてうなりを上げる。一步一步を踏むたびに地震のように足元が揺れた。

「あなたの母親が、サルを生んだとしたら。そのサル、どうしますか？」

「え？」

意味がわからなかった。言っていることが突飛過ぎる。わからなかったので、後頭部をグーで小突いてやった。小突くというか、ぶん殴るくらいのレベルだ。

「あで！」

「母さんがサルなんか産むわけじゃないじゃん！」

「た、たとえばですよ！たとえば！」

「……たとえば。ああ」

そういうことか。つまり、ここで言うサルとはつまり――

「ミーナさんに、聞きたいことがあるんですけど」

「なんだい？」

「もし仮に、本当に産まれてきた弟か妹がサルみたいな見た目だったら、その子、どうしますか？」

また変な質問が飛んできた。拳を固め、後ろ頭に再びインパクト。固めた拳から人差し指をピンと立て、あごにあてて思案する。

「そうだなあ……」

「どうしますか？」

頭を片手で押さえながら顔をミーナに向ける下っ端悪魔。なんとなく、物欲しそうな目に見えた。

「……まあ、見た目が、っただけでホンモノのサルじゃないんなら。当たり前だけど、弟か妹ってことになるし。そりゃ、普通に接するんじゃないの？」

ミリオは顔を前に戻した。

「……そうですよね。ありがとうございます」

「は？」

安堵したような声に、三度訳が分からない。三発目の拳を握ったところで、

「着いたぞ！」

グルカが叫んだ。小さな丘の向こう側、立ち上る炎の柱と地響き。風はいつの間にか弱まり、その代わりに辺りを強烈な熱気が覆っている。

この丘を越えれば、さっきの広場だ。

そのときだった。今までとは比べ物にならないくらい、強烈な閃光がはじけたのは。

「うお!？」

「な、何!？」

地響き、空気をも揺るがし、爆音が鳴り響く。その場にいたものの鼓膜を揺るがし、遠く離れた避難所では村長がひそかに失禁したりした。

光が収まる。炎も姿を消し、残るのは月の明かりのみ。

「……なんだ？」

「俺、様子見てくる!」

リックが飛び出していった。丘をダッシュで駆け抜け、その姿が見えなくなる。

一行も丘を登って、もう少しで向こう側が見えようというとき。リックの声。

「ねーちゃん!おい、ねーちゃん!」

体が動かない。

頭が痛い。

手も足も痛い。

全身が痛い。

だが、生きている。

寝転がったまま、レイアは手元を見た。今まで握っていた剣は途中から刃がぼつきりと折れ、もはや何の力も感じられない。禁呪の剣もこれまでか。

そして、悔しいことにあのおっさんはまだ生きている。

だが、ダメージは確かにあるように見えた。少なくとも黒いマントはあちこち破れ、顔からも血を流している。

これまでか。

そのとき、知った声が聞こえた。

「ねーちゃん!大丈夫か!？」

自分をスカウトしたクソガキだ。こいつにだまされなければ、こんなところには来なかったのに。

もつともこいつは、なんにも知らないのだが。

「……生きてるけどね。あいにく、悪魔はぶつ殺せてない。逃げろ」

「立てないの？」

「……あでで！」

無理やり身を起こしたら、とんでもない激痛に襲われた。

「っていつか、あれ何？」

ムニエルを指差しながら尋ねてくる。ダメージのせいか、悪魔は身じろぎしながらこちらを見ているだけだ。

「……くやしいけど、あいつが悪魔。あんなでも死ぬほど強い」

——この自分を、ここまで追い込むほどに。

「マジで……、あ、そうだ！」

いきなり大声を上げたリックを、びっくりして見上げるレイア。

「な、何？」

「武器持ってたんだ、これ！」

言いながら右手に持っていたものをレイアの鼻面に突きつけて、

「うわ、何しやがる!？」

勇者さま直々の鉄拳を脳天に喰らう。かろうじて落とさずに済んだその武器を、レイアはリックから奪い取って放り投げた。

「何が武器だ！」

「ああ！」

放物線を描いて飛んでいくそれは、地面に落ちる前にふわりと空中で静止する。

「気をつけてくださいよ」

武器を中に浮かせたまま、そのそばに現れたのは青白い下っ端、スパイの悪魔、ミリオ。

彼に続いてミーナとグルカも姿を現した。

「手傷は負わせたみたいですね……。さすが、レイアさん」

「……あんたか」

「ま、話は後で。それより、これは本当に武器なんです。どうせ

手詰まりなんでしょう?」

「はん……。もうちょっと、強い魔法がかかってりゃよかったんだけど」

「……」

ミリオは苦笑する。何の話だか分からない一同は不思議そうな目で二人を見た。

「とにかく、あとは僕の言うとおりにしていただければ済みます。ご協力願えますか?」

昔から、人には疎まれてきた。

彼自身は、なんら疑問を抱くでもなくそこで暮らしていた。当然だ。生まれて十年とたっていない子供が、自らを忌むべきものなどと思っわけがない。

だが、疎まれていた。

自らの兄弟や、両親にすら。

ある日聞こえてきた、女官の声。

——異形。

「うわああっ！」

ムニエルは叫ぶ。目の前には自分に剣を向けた人間の女とその仲間。

怖い。

「どうして、僕は」

受け入れてくれた者たちも、今ここにはいない。

憎い。

「うわあああ！」

傷ついた右の腕を高々と掲げる。空気がうなりを上げ、地が震えた。

豪腕が天を割る。

空気圧の塊が空に押し上げられ、夜空の雲を吹き散らした。

「うおっ!？」

「な、なんだこいつ!？」

ムニエルの力を知らない連中は大いに驚く。天の怒り、地の唸り。世界そのものが敵に回ったかのような光景。

「いきます、よっ」

ミリオは地を蹴つて、ムニエルめがけて駆け出す。右手には折れた剣、レイアの手に使っていた魔剣だ。

柄を振ると、折れた刀身が銀色に光る。光は長く伸びて、あっという間に新しい刃を形作った。

「うそっ!？」

レイアは驚いたが、そもそもこの剣が大きくなるところを見たことのある一同はあまり驚かなかった。

銀光が鞭のようにしなり、ムニエルを真横からぶっ叩いた、かのように見えた。

「うあああつ!」

その刀身はあっさりと弾き飛ばされた。中ほどでぽっきりと折れ、しかし新たな刃が即座に再生する。

「やめろっ! やめろよっ! ぼくは、ぼくは!」

「いい子だから、ちよつと黙っててください!」

ミリオが剣を振りかざし、太ったおっさんに切りつける。刃はムニエルに届かない。

ムニエルはその手をミリオに向けてかざした。

「どっかいけえ!」

赤い閃光、衝撃。

牧場に響き渡った甲高い音と共に、ミリオの体が吹き飛ぶ。

「どっか、いっちゃえ……!」

宙を舞うミリオに追い討ちをかけようとしたその腕に、錆びてぼろぼろになった剣がぶち当たった。

「なら、あんたが失せなよ!」

グルカの発掘した宝剣を握り締めたレイアは、ありったけの力を込めて体を動かしていた。何せ魔法の力がこれまでにないほどに薄まっているのだ。

「おねえちゃんも、やめろおっ!」

ムニエルは斬り付けられた腕を強引に振り回した。傷一つ負っていない。

「うおっ!？」

つむじ風が巻き起こり、レイアの剣が流される。そのまま風に巻き上げられて、錆びた剣は宙高く舞い上がった。

狂気のこもった視線がレイアに向く。しかし、ムニエルが行動を起こす前にミリオが三度背後から切りかかった。

「……もう……やめて……。本当に……」

ムニエルの目に、涙の粒が浮かぶ。苦しめられ、疎まれ、そして今も斬り付けられて。

「うわあああああっ!」

絶叫。同時に強烈な閃光と爆風。

瞬時にミリオは後ろに飛んでいた。レイアも全力で飛び退り、転がってショックを軽減する。

「今です!」

下っ端の悪魔は叫んだ。

レイアはそばに落ちた宝剣を握り締めた。

魔法力を解放。

封呪を解除。

契約の執行、履行を申請する。

「らああああっ!」

宝剣に光が差す。ムニエルの真紅とは真逆、青い光。

それを合図に、散らばっていた三人がムニエルを取り囲む形に立つ。

レイアとミリオ、ミーナにリック、ゲルカ。

五人の位置が、ちょうど五紘星を画く位置に重なった。

宝剣の光が強さを増す。青は白に転じ、赤い光を押し戻していく。

「レイアさん!」

「うらあああっ!」

レイアは光る剣を携えて、ムニエルに斬りかかった。

おっさんの視線がレイアに向く。赤い光がその手に収束した。

青と赤。ぶつかって、はじけた。

それまでの強い地響きから一転、鋭い音と共に風が牧場を走りぬけた。

「……どうなった!？」

グルカが叫ぶ。色の混ざり合った光の中から、何かが飛び出してくる。

マントをまとった太いおっさん。ムニエルは後ろ向きに飛んで、ミーナのほうに転がった。

「……なんで、こんな……」

相当のダメージが見て取れる。すべてミリオの指示で動いていたとはいえ、最初からそうすればよかったのに、と思うほどことがうまく運んでいた。

あとは、仕上げた。

ムニエルはもそもそと動いて、苦しそうな声を上げていた。

「……これが悪魔か……」

ムニエルを近くではじめて見たミーナはちょっと拍子抜けしていたが、手に持った『伝説の武器』を一瞥し、のそのそとムニエルに近寄っていく。

「ぼくは……ただ……」

ちよつとかわいそうな気もするが、気持悪い。

ミーナは伝説の武器を振り下ろした。

頭で勝ち割られたビンの破片が散り、中のものがぶちまけられる。長年にわたって熟成された酸っぱすぎるにおいがはじけ跳び、黒々とした液体がムニエルの頭部に染みた。

「……あうっ」

おっさんは気を失った。だれだってそうなるだろう、とミーナは思う。

エピソード

「あちい……」

勇者様はぼろぼろの服装で、よろよと街道を歩いていた。

「のど乾いた……」

そうは言っても水筒に水はなく、周りを見渡してもあるのは木々と原っぱ、真っ直ぐ伸びる長い道。水分のありかなどは見当たらな

い。

「うう……、勇者なのに」

レイアはジープンのポケットから財布を取り出した。金貨が三枚、銀貨が五枚入っている。これだけあれば三ヶ月は暮らしていける、そのくらいの額だ。

「……」

勇者らしく一攫千金を狙っていたのに。

一生懸命手柄を自慢して、村長らしきじいじに直接交渉して、得た全額がこれ。

とはいえ、あの村にしてみればこれだけでもかなりの報酬なのだ。基本が自給自足、町に出るのが牧場の牛乳くらいと来れば、金銭のたくわえなどせいぜいこの程度。麦や米はたくさんあると言われたが、そんなものもって歩きたくなどない。

そういうわけで、レイアは今サラサ村から得たわずかな賃金を手に街道を歩いている。ふらふらなのは、その金を使う場所が見当たらないからだ。家も店もない街道、人がいなければ金なんかないの金属。

「勇者なのに……」

涙が出てくる。水分がもったいないので、すぐに顔をぬぐった。

「……うつ」

「気がついたか？」

優しい声が聞こえる。はつきりしない意識の中、その言葉がとても温かい。

「……誰？どこなの？」

「あの村の、奥のほうの森だ」

男の声。聞いたことがある。

彼はゆっくりと体を起こした。枕元に座っていた人物を見て、急に意識が覚醒する。

「……久し、ぶり」

真っ黒なコートを羽織った男。フードを目深に被っているが、誰だかはすぐに分かった。

「……おにい、ちゃん？」

容姿からかけ離れたか細い声で、ムニエルは尋ねた。戸惑いが隠せない。なぜ。

驚きに見開かれた目じりに、涙が浮かんできた。

「……どうして、ぼく……」

泣き崩れる。その頭を、ぺちぺちと兄の手が叩いた。

「……ゴメンな」

「……？」

「なんていうか……やっぱり、お前は弟だから。親父や兄貴がなんて言おうが、他のヤツがなんて言おうが」

「……どういう、こと？」

ムニエルには、兄が何を言っているのかよく分からない。

「いいんだ。俺に任せとけ。一緒に暮らせるようになるから、な？」

顔を上げたムニエルの頬に、その手がぺとぺとと触れる。

「……おにいちゃん」

暖かい。

待ち望んでいた手だ。

「行くぞ」

兄がフードの奥から、力強く言う。立ち上がって杖を振りかざすと、深い森の中に赤く輝く紋章が浮かび上がった。

村は大変だった。

たくさんの方が炎上し、ぶっ壊され、あぐく牧場はめちゃくちゃに耕されてしまった。

だが、めげている暇もない。動かなければ死んでしまうのだから。

「……グルカは？」

あれこれと食材の入ったかごを下げたミーナが、リックに尋ねる。彼は今牧場にできた巨大な穴を埋めていた。大勢の仲間と一緒にスコップ片手に、一生懸命体を動かしていた。

「木を切り出しに行つたよ。他の連中もついてった」

スコップを地面に突き立てて、男らしく一息つくリック。

「つーか、何で俺がここで働かなきゃいけないんだろう……」

理不尽な大人に振り回されて、結局この村に留まる事になってしまった。

「まあまあ、いいじゃん。勇者なんだから、村のために働くのが当然じゃん？」

この一件のあと、レイア、ミーナ、リック、グルカの四人は村人から勇者さまに奉り上げられてしまった。村を襲った悪魔を追い払った功績、でも実際に働いたのは主にレイアとミリオだ。ミリオはあのあと気絶したムニエルを連れて行方不明になっている。

そういうあれこれをさして気にした風もなくミーナはすたすたと歩き去っていく。

「どこいくんだ？」

「広場で炊き出し。昼になったらおいでよ。うまいぞー」

「……帰りたい……」

村人が一丸となって復興に力を注いでいる。今日も朝から男達は土木作業に精を出し、女どもは共同で村の雑事に追われている。当

分平和は戻りそうもないが、これはこれで平和なのだろうか。

「じゃ、がんばってね」

「おう……」

ぼそぼそと答える。ミーナは行ってしまった。

「……勉強、してえなあ」

ほんのちよつと前には絶対に聞かれなかった台詞が、ポツリと漏れた。

エピソード（後書き）

えらく時間がかかってしまいました。もうしわけないです。だらだら書こう、と決めて書き始めた作品ですが、最後までだらだらできて良かったような、良くなかったような感じがしています。延べ一年以上。だらだらもいいところです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2213a/>

のっぴきならない事情によりて

2010年10月15日09時37分発行